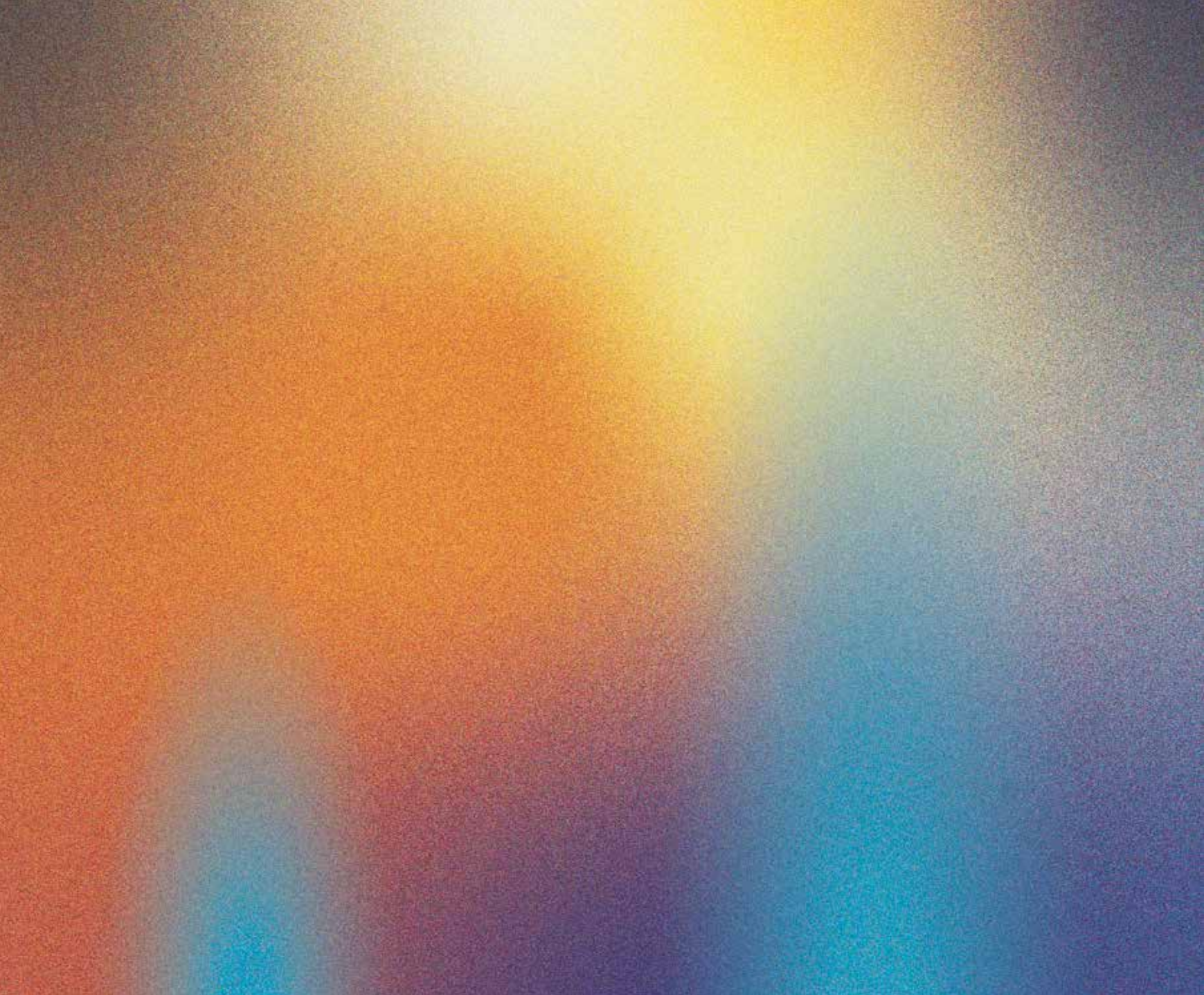
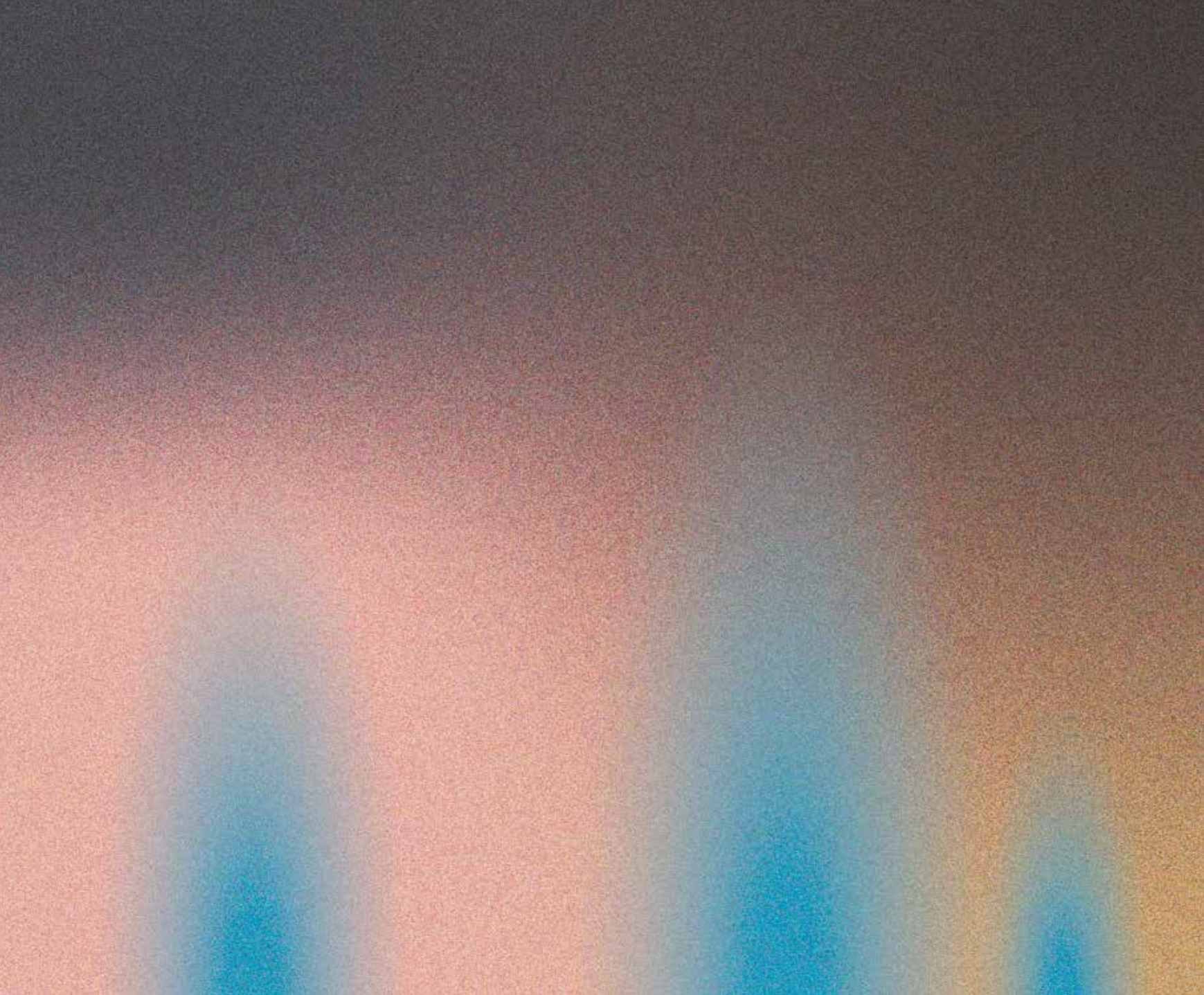
2020 ヨコハマトリエンナーレ
2020 YOKOHAMA TRIENNALE
AFTERGLOW
光の破片をつかまえる

SOURCEBOOK

SOURCEBOOK





10 ヨコハマトリエンナーレ2020
『ソースブック』について
横浜トリエンナーレ組織委員会

13 ソースの共有
ヨコハマトリエンナーレ2020 アーティスティック・ディレクター
ラクス・メディア・コレクティヴ

27 毎日あほうだんす
――寿町の日雇い哲学者 西川紀光の世界
トム・ギル

38 あるベンガル婦人の日本訪問記
ホリプロバ・タケダ

45 友情のセノグラフィ
スヴェトラーナ・ボイム

48 16世紀にビージャープル王国で編纂された
占星術百科事典『ヌジューム・アル・ウルーム』の
著者と意義について
エマ・フラット

56 ヌジューム・アル・ウルーム［図版］

68 光に導かれて――クラゲ、GFP、
そして思いがけぬノーベル賞への道
下村脩、下村幸、ジョン・H・ブリネガー

82 ソースの寄稿者

86 エピソードから始まるヨコハマトリエンナーレ2020
ラクス・メディア・コレクティヴ

ヨコハマトリエンナーレ2020『ソースブック』について

横浜トリエンナーレ組織委員会

2001年の第1回展から数えて第7回展となるヨコハマトリエンナーレ2020「Afterglow―光の破片をつかまえる」はラクス・メディア・コレクティヴをアーティスティック・ディレクターに迎えて開催します。

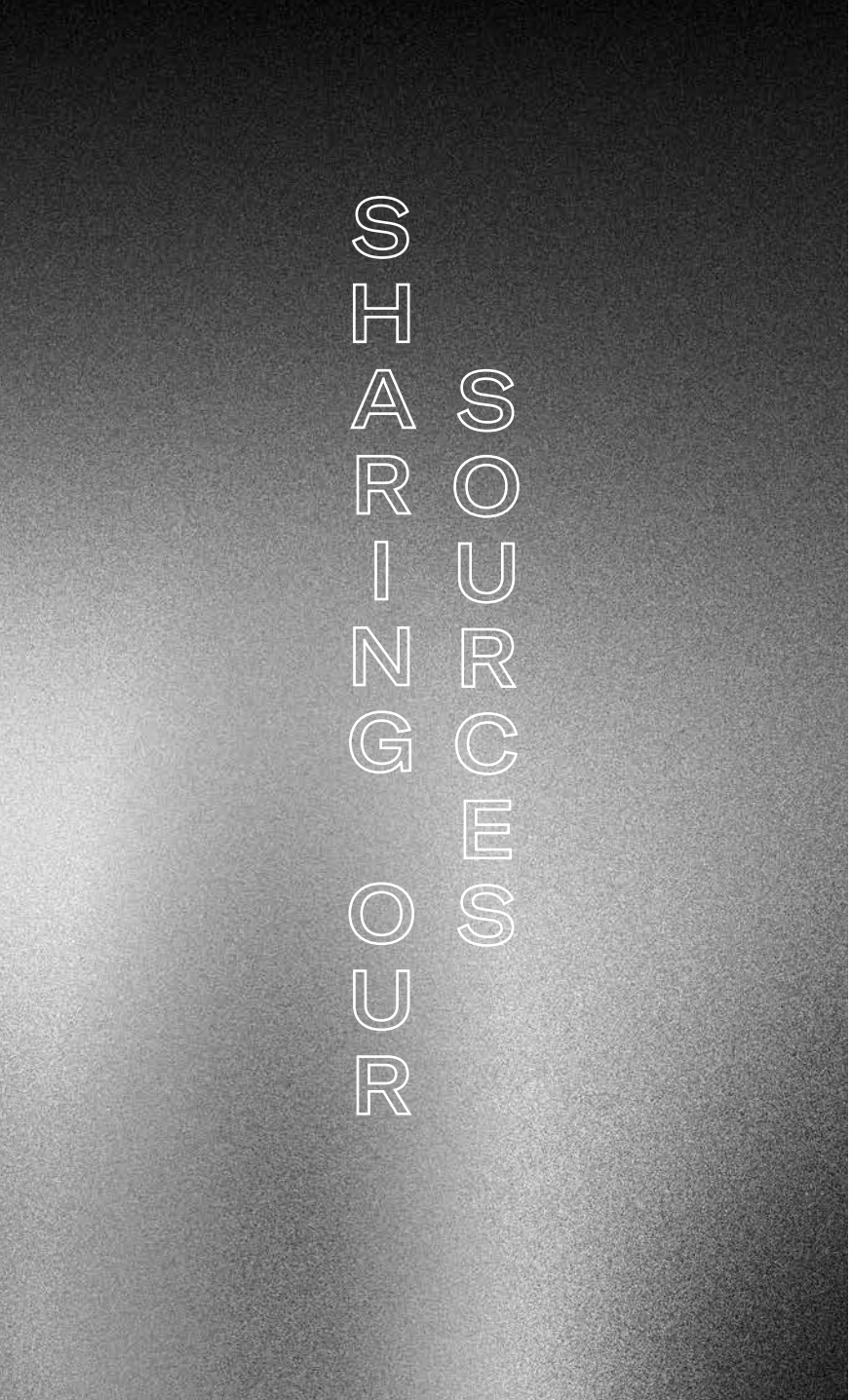
インドを拠点に活躍するラクス・メディア・コレクティヴ（以下、ラクス）は、3名のアーティストから成るアーティスト集団です。ラクスのキュレーションは、「テーマ」ではなく、「ソース」から発想することを特徴としています。「ソース」とは時代や文化的背景の異なる実在の人物の生き方や考え方を例示する資料であり、会話のネタとなり、思考の素材となるものです。ラクスはこれを自分たちが思考の過程にある開幕前の段階からアーティストや関係者と共有することによって、周囲の人を巻き込みながら、展覧会の世界観を作り出していこうと試みます。

『ソースブック』には、その素材となる資料を5つ収めています。そのなかには横浜の寿町の日雇い労働者にして哲学者であった西川紀光（にしかわきみつ）、1912年に日本人の花嫁として来日したベンガル人女性ホリプロバ・モッリク、スヴェトラーナ・ボイムによる友情をあらわすことば、16世紀に南インドを治めていたビージャープル王国のスルタン、アリー・アーディル・シャーの知恵、2008年にノーベル化学賞を受賞した生物学者、下村脩（しもむらおさむ）の研究の様子などがつづられています。そこから立ち現れる在野の人々、あるいは偉業を成した人々はそれぞれ、時代や文化的背景、生き方や社会とのかかわり方がまったく異なりますが、生活に根差した眼差しが示され、独自の光を放っている点では共通しています。

ラクスは、ここにある「ソース」に、独学すること、ケアすること、自ら世界を把握し、自ら光を放つことへのヒントを見出しています。そして、光が遠く異なる時間や場所へとつながるように「ソース」から思考を広げていきたいと考えています。

「テーマ」によって対象を絞り込むのではなく、「ソース」を起点に会話や対話が重なっていき、まるで「茂み」のように豊かな思想と思考の世界があらわれることをラクスは期待しています。

本書を手に、ラクスの思考の旅にお付き合いいただければ幸いです。



ソースの共有

ヨコハマトリエンナーレ2020
アーティスティック・ディレクター
ラクス・メディア・コレクティヴ

ホワイトノイズ

テレビがアナログだったころ、放送が終了すると私たちはテレビ画面の「砂嵐（ホワイトノイズ）」にじっと見入っていたものだ。この砂嵐に迷いこむのは、不思議に心地よかった。このサイケデリックなミニマリズムの中では、ありとあらゆるものが見え、また想像することができた。その電子ノイズはつかの間の視覚的幻想みたいなもので、私たちはその中に模様を見つけたり、幽霊の姿を見たりしたものだ。本来の機能とは異なるその画面は、呪われた風景を眺める窓のようなものだった。

当時は知らなかったが、アナログテレビのまだら模様のホワイトノイズの中には、宇宙誕生のきっかけとなったビッグバンの名残である宇宙マイクロ波背景放射という電磁波が含まれていた。自分たちが眺めているのが、時間の始まりとともに放散されていたものだったなんて！ 爆発するたびに光の残余、すなわち光の名残（アフターグロウ）が漏れる。とりわけ通信信号が消えゆくとき、その光は姿を現すのだ。

ルミナス・ケア

宇宙では常に爆発が起きている。太古の爆発は今も衝撃波を伝え、小爆発を繰り返し、爆発ごとに少しばかりの放射線が放出される。太陽の爆発は、ある種のサンゴから紫外線の毒性への反応を惹きだす。その光から身を守るために、サンゴは自ら発光するのだ。美しい光のパターンは輝きとなり、負担の大きい太陽の放射線から体組織をケアし、守るのである。

いつか、この生物発光のサインが未知の生命体を理解することにつながると考える宇宙生物学者も現れそうだ。その生命体は、巨大な太陽が発する激しい放射線に晒された太陽系外惑星に棲んでいる。地球の海に生息し、自らの発光で遠く離れた太陽と対話するサンゴのおかげで、私たちは別の太陽のある別の世界に棲む生命の本質について研究できるようになるのだ。

生命、宇宙、世界、そして日々の時間は、数えきれないほどの行為を通じて、分解・再構成され、発光に守られて（luminous care）徐々に再建されていく。短い間の傷も、時間の有毒なかけらが放つ残光（afterglow）の中で回復していく。生命とは発光する独学者（luminous autodidact）なのである。

茂み

2007年6月のある昼下がり、西川紀光（にしかわきみつ）── 彼は67歳の放浪する不定期労働者、いわゆる「日雇い労働者」で、横浜寿町の木賃宿に身を寄せ、横浜湾の港湾労働者として生計を立てていた ── 曇り空を仰ぎながら、文化人類学者のトム・ギルと大きな声で笑っていた。彼はこう言った。

> 図にある宇宙卵はドゥルーズとガタリのアイディアです。
> 宇宙卵→誕生、だが未成熟→10年20年30年苦しんで修行すると第2の誕生！ 生まれてすぐ悟りが開ける人もいる。…… 私の場合は、まだ。……我々は宇宙の一部でありながら、宇宙を創設する ……

プロレタリアの賢者にして造船所の哲学者である西川は、独学で得た莫大なソースを私たちに提供してくれる。それは同時に、横浜の街で生まれ、そこに根づく、大胆不敵な横断的意識から得たものでもある。

西川の遺産は、私たちにとっての「ソース」となる。「ソース」とは参照点であり、また隠喩と探求心にあふれる、行為・素材・痕跡の凝集体である。その「ソース」は、私たちに自問と考察のためのエネルギーを与えてくれる。また、身の回りにある文化的・知的素材を貪欲に漁り、指導者もなしに目覚めていくことで知識を身につけるためのエネルギーを。ソースは、さまざまな弧（アーク）、ヴィジョン、ことばの間に非競合で平等の立場を設けられるように、またそれらの要素が互いに関わり、感染しあえるようにしてくれる。

ソースはほかのソースを呼び寄せる。そして、旅の、動作の、重点の移動の、小さな変化と大きな変調の旅程（アイティネラリー）を作り上げる。今日の多軸的な世界にあって、これは自由な解釈の領域を開き、異なる傾向どうしの衝突を助長してくれる。トリエンナーレ制作中の長い熟考の過程の中で、ソースを重層化し、アイティネラリーの厚みを増していくと、創造と発掘を推進する力が生み出されることがわかってきたのだ。

私たちは、遠く離れた場所にいる、あるいは近いところにいるヨコハマトリエンナーレ2020の観客やリスナー、および読者の方々に、一連のソースを提供する。これらは異なる時代、文化的背景や地理条件の場から引かれているが、どれも生きることを大切にした個人または集団が書いたものである。きらめきと白熱が集められてパッチワークが作られ、アーティストとその旅の同行者たちが旅立とうとする道のりを照らし出す。ソースは、私たちの対話を導き、活気づけ、インスピレーションを与え、謎をかける。その対話は、アーティスト、キュレーター、作家、そしてこの旅に興味をもつあらゆる人たちとかわされる。ソースとは、私たちに思考させ、火をつけ、学び、そして学びを捨てるような刺激を与える触媒なのである。

明滅する光

100年以上前、ホリプロバ・モッリクという女性が、ある外国人とともに東ベンガル（現在のバングラデシュ）の村を後にした。彼女が恋に落ちたその外国人は、武田和右衛門という旅する商人だった。彼女は彼とともに船出して、日本という新しい世界を驚きと喜びとともに発見する。日本語がほとんどわからないので、最初は沈黙が唯一のコミュニケーション手段だ。わざわざ世界を半周して一緒に過ごすことになった男の家族と友人との出会いは、彼女の記憶に深く刻まれた。私たちからすれば、彼らは、新しい世界の一員になろうと自ら学ぶひとりの女性に照らし出されているように見える。

私たちの友人であり、アーティストで哲学者のスヴェトラーナ・ボイムは、「友情のセノグラフィ」という文章で、ある光について次のように書いている。

> ……極限の状況においては、光明は哲学的諸概念からではなく、男女が光をともし、与えられたわずかな時間を越えて輝く「不確かでちらちらとゆれる、多くは弱い光」から発するのだ……。「男女がその生まれの如何にかかわらず、互いの閃光を反映しあう」この光明の空間は、私たちが住む現れの世界に光を放つ人間らしさと友情からなる空間である。言い換えれば、友情とは、すべてを明瞭あるいは不明瞭にすることではなく、影と共謀し、戯れることなのである。その目的は啓蒙ではなく光輝であり、盲目的な真実を探求することではなく、不意に出会う明瞭さと誠実さを探求することである。

ホリプロバは、次のように書いている。

……ひとりひとりがそばに来て挨拶をする。若い人も年とった人も皆、帽子を取って正座し、頭を深く下げてお辞儀をする ……挨拶をかわす。ひとりひとりが名を名乗って挨拶し、こちらの体調を気遣い、感謝と喜びを表す言葉を口にする。何かを尋ね、答える度に3〜4回は頭を下げあうのがこちらの習慣である。私は日本語ができないので、黙ってただ頭を下げるばかりだ。……

見知らぬ人にどのように声をかけたらいいかわからなくても、自ら輝くことはできる。一日の労働を終えた体に光る汗からも輝きが放たれるように、あるいは自分の影を分かち合い、細長い空間で相手の影から自分の影が逃げていくときに映し出される光の輪郭のように。
知の形式は、翻訳不可能な経験とせめぎあうことから生まれる。

反百科事典

中世の時代には、南アジア・西アジア・中央アジアと中国・朝鮮・日本との間で、思想や絵、物語やものの考え方が、僧侶、異端思想家、商人、船乗り、巡礼者、逃亡者、奴隷といった旅する独学者たちによってやりとりされていた。

珍しい出来事、そのしるしとそれらを回避する方法の説明
象、発情期の象の死、象の状態と病気の説明
音楽、旋律、旋法、108のリズム、それぞれの長所と短所……の説明
神秘的な旅、瞑想、エクスタシー、奇跡、スーフィーから与えられた14軒の家……の説明

『ヌジューム・アル・ウルーム(諸学の星々)』という16世紀に南インドのビージャープル王国で編纂された占星術百科事典では、

星を見つめることは友人をケアするときの治療薬となるとされている。そのテクストは、インド、アラビア、ペルシャ、トルコ、セムの生きた知識から派生した思想や実践を寄せ集めた内容となっている。

種まきと造園の説明、東風と東風が原因で発生するペストのための薬の説明
医術、病気、痛みの説明、簡便な治療薬と複合的治療薬、病気の原因……の説明
インドとホラーサーンのレスリング、技、流儀と礼儀の説明

南インドの夜空を照らすことばは、ヒンドゥー、ホラーサーン、ウィグル文化、トルキスタン、アラビア、古代ギリシャなどの地域の語彙から発される。ことばは、もとの文化圏から枝分かれし、交配する。移動に伴ってコンセプトを生み出しては、増殖する。呪文と処方箋はサンスクリット語、トルコ語、テルグ語、フランク族のことばで註解(グロス)されている。その註は必ずしも翻訳されているわけではないが、コンセプトをあらわす異語(グロサラリア)で註解され、拡張していく。

火薬の説明と種類、火薬の作り方の説明
香水の作り方、方法論、種類と性質の説明

天文学の暦から書記システムに至るまで、私たちには世界が遠く離れた隅の方まで光を照らしているのが見える。そこで使われているのは、異なる成分を吸収する内在的ながらあまねく広がるエネルギーだ。とてつもなく遠くにあるものをつなげる行為には、膨大かつ永続的な意義がある。この驚くべきテクストの「目次」は、知り得たものと想像で書かれたものの間に内的・外的な境界をもたない宇宙の見取り図なのである。

夢の解釈の説明と真実と偽りの夢の説明

『ヌジューム・アル・ウルーム』があらわす森羅万象には、ほかのものと比べて、特に大きいものも近接するものもない。同時に、小さかったり遠くにあったりするものもない。ここでは行動どうしのきめの細かい網目のようなつながりが受け入れられている。創造的な活動のひとつひとつが、問いのひとつひとつが変化をもたらすソースとなりえ、その変化のひとつひとつが熟考を形作る瞬間をあらわしている。

詩の韻律、リズム、その他詩に関するいろいろなことの説明
寓話と伝奇の説明
商人と職人の技能の道具やわざの説明

実践のしかた、思考の形式、文化的・歴史的来歴のいかんによって意味のあるなしを規定するような既成のヒエラルキーは存在しない。自分の知っていることをシェアする人は、あるいは自分の知らないことに興味をもつ人は友だちになれるし、友だちをケアすることもできるのだ。

漁師のアドバイス

1945年8月に長崎に原子爆弾が投下されたとき、下村脩（しもむらおさむ）は長崎郊外に住む16歳の少年だった。近くの諫早市で目撃したその目のくらむような閃光を彼は生涯忘れることはなく、そのとき一時的に目が見えなくなったとのちに語っている。彼はその後生命体のなかから光が発生するという生物発光の研究の道に進み、生涯をかけて光と生命の関係性を追求することになる。最初は有機化学を専攻し、ウミホタルの研究にいそしんだ。

生物学者、海洋学者、漁師……のアドバイスの協力を求めることを勧める。

下村の研究でもっとも重要な発見はウミホタルの研究以降のこととなるが、その研究を支えたのは、1万匹のクラゲだった。彼はその1匹1匹を丁寧に観察したのだ。彼が漁師と友だちになることをさかんに勧めるのも、驚くには値しないだろう。

オワンクラゲから単離、精製することに成功して発見された蛍光タンパク質（GFP）は、その後実地に応用され、ある遺伝子が発現しているかどうかを容易に判別するレポーター遺伝子の通告により、水域の汚染状況と有毒物質の水準を測るために利用されるようになる。レポーター遺伝子に「移入（トランスフェクト）」された生命体は「発現」し、有毒な物質の存在に反応して「発光」する。この技術は、それ自体では無害なので、バイオセンサーとなり、水界生態系の健全性を維持するための生体レポーターとして重要な手段となった。

分割

サンゴは紫外線の毒に対して発光し、オワンクラゲは毒性を探知するレポーター遺伝子を集めるために採取される。発光と有毒性の間にはつながりがある。

死んでいるなら毒性について考える必要はない。生きた細胞を成長させる条件は、その衰弱を惹き起こす環境とも切り離せない。私たちは、環境、内部要因、外部刺激など、成長をしのぐほどの、あるいは抑えるほどの衰弱を惹き起こすものを毒性と呼ぶ。それは毒であったり、汚染であったり、治療（矯正）であったり、廃棄物であったり、抑えがきかなくなるほどの成長であったりする。

毒物も、排除とヒエラルキーをシステム化する礎となる。インド半島の文明の毒物と生命の関係をめぐる深淵な非−思考を繰り返さぬよう学ぶことができる。それは何千年もの間続いてきたし、今でも続いているのだから。毒物が多勢の人にとってのお荷物になっている一方で、ごく少数の人はまったく汚染されぬままだ。排泄物や死骸から発生する臭いや毒素に汚染されないよう生物圏を清潔に保つという困難な仕事はかくして分離された。死を、感染症を、人間と動物のし尿を、生産物のかすを扱うことは、時間・権力・財をもつ人の仕事では、すっかりなくなってしまった。

闇の部分を分かち合うことはなくなってしまったのだ。

生命のケアと自己のケアは、毒とともにケアすることなしには

成立しない。私たちは、自分たちの抱える病、屍肉、生産と消費のサイクルが出す残留物について考えなければならない。そのとき、運命という名に隠された残酷な労働区分をしてはならない。都市郊外に広がるゴミの山はどれも、現在が生み出した未来への需要を表している。だが、そんな未来には報われる保障もない。せいぜい考古学者たちがやって来るくらいだろう。ケアする光と毒のもつ闇の部分を分割することは、この惑星の生命体の未来に対して害をなすのだ。

有毒な光

原子炉のメルトダウンが起こす不思議な現象に、経験はできるが目では見ることのできない光輝（glowing light）の知覚というものがある。チェレンコフ効果として知られるこの現象は、メルトダウンもしくは「臨界」時に荷電粒子が誘電体の内部をその物質内での光速よりも速く進むときに放射される光によって現れる。そもそも核物質から放射された光速より速いものが眼球の硝子体液を通過したときに現れる「蒼い光」は、眼球のなかの「経験」が脳に伝達されて知覚されるもので、視覚的現象として「見る」ものとは異なる。目が、目の外の、あるいは目の前の光を知覚していたとしても、人間が目にするという環境で起きたことではない。宇宙飛行士たちも太陽が宇宙で原子爆発する際に放射される太陽放射で同じような経験をすることがある。

その光は、美しいには違いないが、有毒な放射能のマーカーでもあり、ヴィジョンとして経験されるのだ。この亡霊のような光は、福島の原子力発電所の事故の後にも経験されたといわ

れている。私たちの理解では、現代という時代のもつ毒性は、この亡霊のような光を育むことと出会わされなければならない。アーティストはこの光輝を、その美しさと危険性を感知しようとする。そのおかげで、私たちは常に身の回りで起きているあらゆるメルトダウンを見ることができ、これから生き抜くための――あるいは繁栄していくための方法を学べるようになるだろう。私たちは毒性と共存する生き方について考え始めなければならない。それを追放することは愚行だという自己認識に立たなければならないのだ。

翻訳不可能なことば
―オントシラ

ベンガル語の「antashira（オントシラ）」ということばは、内在的な流れとあまねく広がる感覚を表すときに使われる。この流れと感覚は、日々の暮らしの中に流れる知覚の層を作り出す。オントシラは、「気」のように、神経系のエネルギーの流れに似たものだ。「オントシラ」は、そのすべての広がりの中に生命を形づくる。今日、世界は、さまざまなオントシラの中から持続性とインスピレーションや力を引き出さなくてはならない。オントシラは、私たちの内在的であまねく広がる力であり、私たちすべての間を流れていく。その流れにつれて、私たちは、個々の生のミクロコスモス（小宇宙）と、この惑星というつながりあった生命と、宇宙というマクロコスモス（大宇宙）の関係を作り直すのだ。

参考文献：

The Big Bang's Playing on TV
https://www.nasa.gov/vision/universe/starsgalaxies/cobe_background.html

Jack T. O'Malley-James and Lisa Kaltenegger, "Biofluorescent Worlds – II. Biological fluorescence induced by stellar UV Flares, a new temporal biosignature," *Monthly Notices of the Royal Astronomical Society*, Volume 488, Issue 4 (October 2019), pp. 4530–4545.

Tom Gill, *Yokohama Street Life: The Precarious Career of a Japanese Day Laborer* [Asia World Series of Publications] (London: Lexington Books, 2015).
和文はトム・ギル『毎日あほうだんす――寿町の日雇い哲学者西川紀光の世界』（2013年、キョートット出版）より抜粋。

Svetlana Boym, "Scenography of Friendship," *Cabinet*, Issue 36 "Friendship" (Winter 2009–2010)
Online article: http://www.cabinetmagazine.org/issues/36/boym.php　翻訳：清水知子

Hariprabha Takeda, *Bongomohilar Japan Jatra* (A Bengali Woman's Voyage to Japan), first published in Dhaka, 1915. Reprinted by Sahitya Prakash Publishers, Dhaka, 1999. English translation from Bengali by Debjani Sengupta, commissioned for Yokohama Triennale 2020.
ホリプロバ・タケダ「あるベンガル婦人の日本訪問記」『遡河』第10号（富井敬訳、1999年、遡河編集部）

Emma Flatt, "The Authorship and Significance of the Nujūm al-ʻulūm: A Sixteenth-Century Astrological Encyclopedia from Bijapur," *Journal of the American Oriental Society*, Vol. 131, No. 2 (April–June 2011), pp. 223–244.
翻訳：帆足亜紀、翻訳監修：矢野道雄

Osamu Shimomura, "Advice to Students Who are Interested in Studying the Chemistry of Bioluminescence," *Bioluminescence: Chemical Principles and Methods* (Singapore: World Scientific Publishing, 2006), pp. 375–378.
翻訳：帆足亜紀

Raqs Media Collective, "The Equal Division of Toxicity," *Livemint* (29 August, 2018)
Online article: https://www.livemint.com/Leisure/JuxEvOeT79uyhy5q75DRbI/Raqs-Media-Collective-dreams-of-an-equal-division-of-toxicit.html

E.D. Clayton, *Anomalies of Nuclear Criticality*, Revision 6 (Washington: Pacific Northwest National Laboratory, 2010).

SOURCES

毎日あほうだんす
——寿町の日雇い哲学者
西川紀光の世界

トム・ギル

6時15分になった。西川が仕事を探すのに集中できるように私は一歩後ろに下がった。すると労働センターのシャッターが上がった——今日は30件程度と前日ほど仕事がないようだ。ほかの日雇い労働者の波とともに西川は前のほうへと進む。2列目に並んだので、何か仕事を手に入れるだろうと思ったのだが、ほかの男たちのように人を押しのけていく気概がなく、後ろから割り込んでくる男たちが西川より先に仕事の申込書をとっていく。1分ほどで仕事は全部なくなった。仕事がなくてうんざりして帰り始めた男たちのなかで西川はもうしばらく待った。そして、遅れて提示された仕事を目の前の事務員の手からなんとか奪い取った。

「労働者1。西川紀光、53才、土工」と書いてある紙切れを私に見せる。三ツ境での仕事なので、電車と徒歩で約45分。12,500円の賃金と昼食代が500円。「石を運ぶ」と、「舗装版」をねこ車に積む動作をしながら、仕事の内容を説明してくれた。

「いい仕事?」

「重労働、存在自体への罰!」

大声を出して、笑いながら繰り返した。

「存在自体への罰!」

そう言い放って、歩き出した。私は思った。「2000年、60になったら死ぬだろう。20世紀最後の見られざる最後の実存主義者のヒーロー。」(1)

/

2007年2月3日の聞き取り

私の名前は西川紀光。にしかわ・きみつ。生まれは1940年、昭和15年。ジョン・レノン、アル・パチーノ、ピーター・フランプトン、ラクエル・ウェルチ、ジャック・ニクラウス、相撲の大鵬と同じ年ですよ。親は大げさな名前を付けた。戸籍にある正式な読みは「ノリミツ」となっていて「この世紀のひかり」というつもりで付けたと思います。……若いとき、占い師に縁起悪いと言われました。「川」と「紀」は画の数は3+9=12、でそれはlifeが悪い、ノイローゼになりやすい、結婚しにくい、ということで。

「西」も問題ですね。仏教の空の思想では悪いものはすべて西から来ますからね。西は日没の方向だから、世界中で死者の世界は「西」にあるとされる。川を越えて、ゴン・ウェスト。ダライ・ラマも空の問題に取り組んでいます。私はこんな問題に興味ありますよ、奇妙な弁証法です。「空そのものは文句無しに実存しているか。」面白おかしい問題ですね。G.K.チェスタートンもそれなりにその問題に取り組んでいました。独特なユーモアもあってね。だからこそチェスタートンは東洋で人気があると思いますよ。彼の死刑論は面白い。「死刑反対であれば、刑務所の外で叫んだりするのではなく、刑務所に入って、死刑になる人と抱き合って、涙をぼろぼろ流して『あなたは死ぬべきではありません!』というべきだ」と。つまり実践主義ですね。人間ひとりひとりに注目するという意味でね。

/

2007年2月17日の聞き取り

/

今の人間には退行現象があると思います。真実のことから逃げてしまう。一番悪いのは権力、国家。国家のせいで解決不能の不条理と不合理が生まれました。これはやはり20世紀の最大なテーマですね。本当にリラックスした生き方、安心な生き方ができなくなったからね。今だって、北朝鮮がいつ日本に原子爆弾を投下するか分からないでしょう。不安

な、フランツ・カフカのような気持ち。カフカはヒトラーが政権を取る直前にうまく亡くなりましたね。……

/

私が影響された人にはグル中沢(中沢新一)とかコリン・ウィルソンがいる。あとはヘルマン・ヘッセ、ジョン・スタインベックとかサマセット・モーム、ドストエフスキーのシベリア抑留の話。一貫性はないですよ、教育がないから。

——日本人のヒーローはあまりいない?

いますよ。おやじ。グル中沢。あと港湾の立派な組長、名前の分からないヒーローですよ。彼らは本当のヒーローですよ。……

グル中沢はオウム真理教の問題で批判されたけど、学者には一つぐらい間違いをしても許されてもいいじゃないかと思いますよ。ポール・カンメラーというオーストリアの生物学者はウイリアム・ベイトソンに批判されて自殺しましたし、ジョージ・オーウェルとかアーサー・ケストラーはさんざん非難されているではないか。

グル中沢は熱心ですからね、たくさんの本を出版して。実践的だし。神話には詳しいし。一番好きなのは『チベットのモーツァルト』とか『はじまりのレーニン』、『バルセロナ秘数3』、『緑の資本論』。これらがコアじゃないですか。対称性・Symmetryの考え、抑圧された、潜在的な、無意識な、流動的な知性、これらがキー・エレメントじゃないでしょうか。

対称性について言いますと、遠くから見たら、人間と人間の間、人間と動物と植物の間に大した違いはない。人間は特に飛び出るほど偉いものではない。そういう面白おかしい観点がありますよ。3年間チベットに行ったから説得力があります。羨ましいですよ。……

2007年2月25日の聞き取り

戦争が終わった日、よく覚えていますよ。今まで見たことない青空でした。感動的でしたね、子供の私にとって。凄く静かでした。針が落ちるのも聞こえるぐらい。空が青い、清らかに。……

/

私は権力が嫌いですね。強圧的な先生とか神父とか。キリストとか仏陀はそういうことしないよ、本物の神は権力的じゃないですよ。

/

2007年3月3日の聞き取り

/

北イタリアで発見された化石みたいなものがあります。若い男と女が抱き合ったままで殺されたという感じ。『サンデー毎日』で見たよ。イタリア人の考古学者が掘り出した。未成年でセックスしていたから石を投げられて殺された。社会秩序を脅かすから。部族が違うと恋愛は禁じられていたとか。それはものを言うと思いますよ。神の掟、父親の命令に抵抗してはいけない。やはり、父親の権力が強すぎるといけないですね。

/

……横浜は結構面白い街で、アメリカ人がたくさんいました。自衛隊はこれぐらいでいいと思った、何か違うことをやろう、と。サミュエル・ジョンソンのように、色々の経験を積んで、百科事典的な人になろう、と。そのほうがリラックスできるから。Specialist（専門家）ではなく、generalist（万能家）。ジョンソン、またはH.L.メンケンのような人に。

最初は横浜の日産自動車生麦工場で働いた。川崎のドヤのようなアパートに暮らしていたが、ある日となりの男が「土方の仕事を紹介してやる」と言ったので、応じました。[2]

/

2007年3月10日の聞き取り

/

前回の記録を紀光に見せたら「あほうダンス」は表記が違っていると言われました。「今日明日生きられるといい、それで精一杯。毎日はあほうダンス、まったなし」の部分。

トムが思った「あほうの踊り」ではなく、アフォーダンス（affordance）です。これは生物学の話。遺伝学やダーウィンを超えた自然科学の話。[3] ブラジルとかチリで研究されているけど、まだ証明はされていないオートポイエーシス（autopoiesis）やアフォーダンスはウンベルト・マトゥラーナやフランシスコ・ヴァレラーの概念で、中沢新一も大事にしている。自然の世界で子供が産まれるとき、それをライオンから守らなければならない。外と内の間に壁はない。[4] ワットソンとクリックがDNAを発見して以来の自然科学の発見。ロンドン大学のデイビッド・ボーム先生もこだわっているよ。ハルマゲドンの話とも関係する。千年に一回大きな災害があって、その後人類はまたゼロからやり直す。

オウム真理教やデイビッド・コレシュはこの概念を上手く利用していた。……

/

2007年3月24日の聞き取り

/

ボサノバ等ブラジルの音楽が好きで、ブラジルの貨物船のデッキで一服しながらそれを聞くのはとても楽しかった（ボサノバの踊りの仕草）。それでブラジルにつながっているという感じで海に飛び込んでブラジルまで泳いでいきたくなった。船員は皆ラジカセを肩において音楽を聴いていた。他の船もよかったが、ブラジル船は一番だった。

アン王女がマーク・フィリップスと結婚したとき、山下でケープタウンからコーヒーバッグを運んで来たイギリスの貨物船で働いていました。デッキまで行きまして船長に挨拶しました。「おめでとう」と。それで船長に誘われて、昼休みの時、一緒にワインを飲むことになりました。

2007年4月15日の聞き取り

/

「いや、横浜まで戻れないと生きていられないから」

2007年4月18日の聞き取り（その1）

/

私は『ブライトン・ロック』などの海の物語は好き。ジョセフ・コンラッドの『台風』とか、最後は海で助けられる。砂漠の話は重苦しい。スタイン

ベックの『怒りの葡萄』とか。オクラホマは砂漠になって。砂漠の人はある意味では一番モダーンですね。一番海から遠いから。皆求めているのは海ですよ。ターナーの海の油絵が大好き。あの暗い海の嵐の瞬間。私たち人間は水溶性の動物ですから、精神的に穏やかになる。……

/

2007年4月18日の聞き取り（その2）

/

世界が平和になるにはエクストラ・テレストリアル（地球外生命）の侵略が必要でしょう。コモン・エネミー（共通の敵）。ユーゴを見てごらん。スターリンとヒトラーという危ない敵がいる限り、様々な民族マイノリティーが一緒に頑張ることが出来たが、その敵が消えると内戦状態。世界全体が同じ仕組み。

/

2007年4月18日の聞き取り（その3）

/

Autopoiesis. インプットがない、アウトプットもない、ブートストラップのようなもの。Self-reproducing system（自己再生システム）。外部と関係なしに自分で再生産します。人間は蛋白質から出来ています。蛋白質は細胞を作る、細胞は蛋白質を作る、それは永遠な繰り返し。人が死ぬ日まで、続きます。George Bernard Shawなら100歳まで、Harold Wilsonなら70歳まで。Autopoiesisはブートストラップ、テンソル・フィールドのように、ヘーゲル的な弁証法でずっと続きます、細胞が自殺するまで。ずっと上まで伸びて、横に動くわけはない。純粋な運動ですね。中沢新一もそれに注目をしている。雑音がない、外縁量[5]はない。やっと悟るところまでたどり着きます。シンプレクティック多様体と中沢が言う。

/

2007年4月25日の聞き取り

/

寿町の人のほとんどは反権力。大阪の釜ヶ崎の人ほどではないが。（関西人は迫力ありますね。）昭和39年、1964年、初めて寿に来た。ここは俺みたいな貧乏人のためのところ。とにかく、仕事がある。港湾労働、建設、トラックの運転手など。これなら、生きられる。私のサバイバルパック。町は活気がある、水蒸気のように、台風のように、ハリケーンのように。焼き肉食って、焼酎を飲んで。中華街で外国人と一緒に飲んで。アメリカの水兵、ヨーロッパの船乗り。フランス、ドイツ、イギリス、インドネシア、フィリピン。決まったバーがありましたよ。英語を覚えたが、だいたい酔っ払っていたから、ろくなものを覚えなかった。パングリッシュ（昔のパンパンガールが覚えるようなピジン英語）だけどね。文法無し。昔、米兵が日本人の女をパワフルな腕からぶら下げているのを見たことある。男がでかく、女がちっちゃいからそう見える。俺たちは肉食じゃないからしょうがないです。

/

2007年4月28日の聞き取り

/

『アウトサイダー』は日本でもベストセラーでした。「怒りの世代」は日本でも有名。［コリン・］ウィルソンはハンプステッド公園のテントに暮らして、彼女ができて、遊びまくっていた。それをセックス日記にして彼女の父親にぼこぼこ［に］されるところでやっと逃げた。まあ、彼は実存主義者ですから当り前な生活ぶり。……

/

ウィルソンは常に「ピーク・エクスピリエアンス」（peak experience／至高体験）を探しているが、その至高体験のあとはどうなるか、それが気になりますね。ハイの後にはカムダウンが待っているかも。仏教にもそういう問題がある。悟りを開いてからどうする？ 一旦至高体験ができたら、堕落した生活は出来ないでしょう。

ウィルソンはこの本で数人の文化的ヒーローの話をします。例えばフィンセント・ファン・ゴッホ。『星空』というものすごく美しい、そして命の楽しさがあふれる名作を描く。そして命がたまらなくなってしまって自殺してしまう。前者は絵画的な至高体験で、後者はある意味で同じ絵画的な動作。ゴッホも実存的な思想家ではないか、……

/

2007年5月12日の聞き取り

/

私は寝たらしばらくは真っ暗だが、そのあとは夢を見る。きれいな夢、汚い夢。生きているときは身体に拘束されていますが、死ぬとそういう拘束がないからどういう夢を見るでしょうか。オーストラリアでアボリジニーをフィールドワークしたエルキンは言っています、神話は集合的無意識を表現する話、人間の共同体の夢。バートヘーゲンやイロルングアの儀礼では妊娠した姉の血を流して、ドラゴンが立ち上がるという。自然を汚すと天罰が当たるということ。アイヌもそうですね。

日本なら高野山とか長野とか。日本人はお守りを持つし。……

/

白い光はスペクトルに分かれると「オーム」は白、「ばじら」は黄色、「さっ」は赤、「と」は緑。「とば」は青。最後は青色。スピードがある光は青。……

/

われわれ人間たちはスローで、Painful world に暮らしている。スピードの問題。作動原理。心の問題。心は鏡のようなもので、色々のイメージを作る。相手に執着する。何かに執着すると黒くなる。

2007年5月26日の聞き取り

/

本を読むようになったのはオイルショックのいい結果でした。もし仕事がずっとあったとすれば、図書館に行かなかったでしょう。ずっと働く・稼ぐ・飲む・遊ぶと、dull（つまらない）まで刑務所で終わったでしょう。Negligent（怠惰）でね。ホッファーが言う通り、「ものごとを考えぬくには暇が要る。成熟するには暇が必要だ。」図書館は無料だから、金がないときに最適。

/

今の日本はnegligentで精神的に不景気です。アメリカやヨーロッパより悪いよ。皆に「Wake up！ 起きろ！」と言いたいけど、そうすると警官に逮捕される。今の日本社会は病気で、私は処方箋をあげたいが、受け入れてくれない。……

/

格差が広がっていって、アメリカのモデルに近づいている。だけど私にはルサンチマンはない。私の場合は日雇い労働者になるのは運命、カルマですよ。でもアイヒマン、ヒトラーは今地獄ですよ！ ダンテのインファーノ。東條英機もね。みんなhell！（笑い）。永久の罰則を受けている。それは計算されているよ、数学のように。人間はmaterial（物質）だから、常に腐ったりして、終わりに近づいていく。でも死ぬと逆転があるよ。健在の時、野良猫や犬に餌をあげる人は亡くなってからその見返りが来る。

/

2007年6月2日の聞き取り

/

仏教・密教の関心はドイツ人のヘルマン・ベックとイギリス人のクリスマス・ハムフリーズの本を読んで。それでチベット仏教のマニアになった。ベックの本が私に飛んできました。50歳を過ぎてから、寿の労働センターの前にいた時、図書室係はたくさんの要らない本を捨てていた。その中にはヘルマン・ベックの本、『仏教』があった。文庫本の上と下。労働センターの図書室から捨てられて。その日処分された本の中には3冊の読みたいやつがあった。シェイクスピアの研究とか。中国とアメリカの外交関係とか。そしてヘルマン・ベック。

何となくジョージ・オーウェルが会話に出た。

オーウェルの作品には理想主義、ユートピア的な考えがある。でも地に足がついています。しっかり経験に基づいて話しているから。労働者の見方で世界を見ているし。オーウェルは当たっている。人類はダーウィン的な進歩をせずに、むしろ劣化している。あの人は経験しているから尊敬しますよ。スペインの内戦で撃たれてしまって。

『1984年』は傑作ですね。アーサー・C・クラークの『2001年』に負

けない。「テレスクリーン」がキーワード。プライバシーのない生活。独裁者はあらゆることを見ることができる。集中的権力。Central power, central heating（集中権力、セントラル・ヒーティング）。今の社会には監視カメラが多いですね。国会とかそういう所にあってもいいけど、銀座とか渋谷においてはいけない。だって、犯罪が完全に無くなったら、探偵映画とか犯罪小説は作れなくなるから。犯罪とかギャングは文化の一部で、人気が高い。彼らをみな潰そうとするのはファシズムですよ。慈悲の精神、Compassion（同情）、それが権力者の一番必要なものですよ。

/

2007年6月10日の聞き取り

/

……図にある宇宙卵はドゥルーズとガタリのアイディアです。

宇宙卵→誕生、だが未成熟→10年20年30年苦しんで修行すると第2の誕生！ 生まれてすぐ悟りが開ける人もいる。……私の場合は、まだ。……そして悟りが開けば女に戻る。我々は宇宙の一部でありながら、宇宙を創設する……

編註

(1)『毎日あほうだんす』の後に出版された同著者による下記の文献において追加された部分から引用・翻訳して掲載した。Tom Gill, *Yokohama Street Life: The Precarious Career of a Japanese Day Laborer* [Asia World Series of Publications] (London: Lexington Books, 2015), pp. 16–17. Copyright © 2015, Used by permission of Rowman & Littlefield Publishing Group. All rights reserved.

(2) 前掲の『Yokohama Street Life』(p.48)には下記のとおり追加記述がある。
「そして川崎の原っぱに行って仕事をもらうようになって、そのあと横浜の寿町に。数年東京の山谷にもいました。」

(3) (2)に同じ:『Yokohama Street Life』(p.50)
「アメリカの生態心理学者ギブソン(J.J. Gibson)が提唱している。彼によれば、私たちは実際には目で見たり、耳で聞いたりするのではなく、どちらかというと何かを見せられたり、何かを聞くことを許されたり、環境が経験を与えてくれる。足の下に土があるから、歩ける。椅子は座る可能性を提供(アフォード)してくれる。」

(4) (3)に同じ
「子供のころ、もっと高い目標について考えるアフォーダンスなんて全くなかった。戦後の混乱のなかで、ただ、日々生き抜くのが精いっぱいだった。」

(5) 西川紀光による表記は「外縁量」だが、「外延量」の誤表記であると思われる。原典p.87の註7には以下の記述がある:「たぶん『外延量』(物理用語, extensive quantity)を一字間違えた。…… 外延量は加法性が成り立つ量であり、長さ、質量、時間、面積、体積などである。内包量(intensive quantity)は加法性が成り立たない量であり、温度、速度、密度、濃度、利率などである。」

トム・ギル『毎日あほうだんす――寿町の日雇い哲学者 西川紀光の世界』(2013年、キョートット出版)より抜粋
翻訳(追加部分):帆足亜紀

あるベンガル婦人の日本訪問記

ホリプロバ・タケダ

8時、遠くに島影が見えた。船が何隻か止まっているのも見える。島には山がある。ここの海の水は緑色をしている。陸が近くなったからだ。11時頃、船は島のすぐ近くまでやって来た。海に出る道と木々が見える。暑さが厳しい。シンガポールに着くまでは大変だろう。

/

……午後からずっと、船はひどく揺れ続ける。波は恐ろしい唸り声をたてて船に覆いかぶさり、すべてをびしょ濡れにする。上に乗っていたものはすべて床に落ち、部屋のなかをあちこち転げ回る。ボーイが2人やってきて、すべてのものを一緒に縛りつけて床の上に置いていった。何かに掴まっていない限り、立っていることができない。長椅子に座っていると前に転げ落ちてしまう。その点、寝台には四方に柵がついているので落ちる心配がない。だが私たちの寝台は2つ並べてあって、しかも少し長目なので頭のほうや足のほうに体がずれてしまう。寝台にしっかり掴まって揺れに耐えなければならなかった。眠ることも出来ない。頭が上下に揺れる。どの位揺れ続けていたのかわからない。食欲はない。船には千人ほどの中国人が乗っていたが、皆絶食していた。……

/

……ひとりひとりがそばに来て挨拶をする。若い人も年とった人も皆、帽子を取って正座し、頭を深く下げてお辞儀をする …… 挨拶をかわす。ひとりひとりが名を名乗って挨拶し、こちらの体調を気遣い、感謝と喜びを表す言葉を口にする。何かを尋ね、答える度に3〜4回は頭を下げあうのがこちらの習慣である。私は日本語ができないので、黙ってただ頭を下げるばかりだ。……

/

……店にはさまざまな品が美しく飾り付けてあった。日本と外国の服やしゃれた日用品から食べ物まで揃っている。私たちはここで食事をした。この店のなかの部屋のひとつには様々な種類の花や木が置いてあった。外の冷たい風が入らないようになっているので、この寒さの中でも木は生き生きとし、花は咲きほこっている。時折、客の気分をなごますために、楽団が演奏していた。……

/

……社の外側には、木の塀で囲まれた建物がある。その中の三つの扉を通って行くと一室があって、そこに神様がいらっしゃるのだという。外からはお社の中の真鍮で出来たその建物が見えるだけである。一般人はここより中へは入れない。神様がどんなお姿なのかは分からない。だが、この宏大な神社にその無形の神様が祭られていることは充分に感じることが出来るし、神様のお姿を見られないことでかえってその感覚が助長されるようだ。大勢の参拝客が訪れていた。庭園の一角に、先のロシアとの戦争の時に戦利品として獲得した2門の大きな大砲、日清戦争のときの大型大砲1門と小型のものいくつか、それに戦艦の大きな錨が置かれている。伊勢にはここの他にももうひとつ、このように庭園で囲まれた神社がある。そこの池では赤い魚やいろいろな大型の魚が泳いでいた。透き通った水の中の魚たちは、食べ物を求めて見物人たちの所に一斉に集まってくる。池のほとりではビスケットなどを売っていて、見物人たちはそれを買い、魚に食べさせて楽しんでいた。参拝を終えて、夕方の汽車で帰宅した。

夫は大きな腫れ物が出来て、数日間苦しんだ。

1月1日、お正月。前日には畳を上げて大掃除が行なわれた。今日は皆、新しい服を着て新年を祝っている。1月1日は町中の人が新しい年の始まりを喜ぶ日なのである。祝賀の行事は7日間続く。神社や寺では幾日かにわたって祭りが行われる。それにいろいろな芸能だの、闘

兵式なども披露される。村でもこの国の新年を盛大に祝う。元旦には新しい服を着て神社にお参りに出かける。子どもたちは、皆揃って外に出て遊んだり凧を上げたりする。家々は葉や旗で飾りたてられる。2日になると朝、沐浴をしてから仕事始めの行事をする。それぞれの仕事を少しだけして、吉兆とするのだ。……

/

東京は日本の首都である。東京では特別のいくつかの建物を除いて、後はすべて木で出来ている。首都としてはそれほど立派とも思えない町だ。道には人力車と路面電車がひっきりなしに通り、ごくまれに馬車が走っていく。道巾は広い。雨が降ると、どこもかしこもぬかるみとなる。木の履物を使うせいで、泥が一層深くなる。路面電車はとても便利で、5パイサで切符を買って、町のどこへでも行ける。途中乗り換えがあっても一枚の切符ですむ。電車は1両だけで、1等、2等の区別はない。車両の前後に扉がある。電車に乗って車掌から切符を買い、下りるときには手渡さなければならない。赤く塗った柱のある停留所で電車は止まる。停車する前に車掌は次の停留所の名を告げ、下りる人がいるかどうかを尋ねる。誰も答えなければその停留所は通過していく。時折、慌てることなく乗車と下車をするようにと注意を促す。道端にはところどころに小さな小屋のようなものがあって、警官が駐在している。道などを尋ねると教えてくれる。日本の警官は刀を帯びている。警官たちは威張ったり嫌がらせをしたりすることなく、治安を守り、誰に対しても礼儀正しい。また電話をかけるための小さな建物がそこかしこにあって、5パイサで5分間電話をかけることができる。

……ある女学校に見学に行く。女性の教師が案内をしてくれた。英国に行ったことがあるという人で、立派な学歴の持ち主で、英語もかなりのものである。2〜3時間あちこち見学してまわった。豊かな生活を手にいれて人間らしい人間となり、子どもたちと国の民をきちんと育て上げるために必要な教育のあらゆる機会がここには揃っているように思われる。この学校では化学、植物学、地学、生理学などカレッジで学ぶような程度の高い科目から、料理、洗濯、掃除の仕方、ちょっとした庭仕事、裁縫、音楽、美術、道徳、英語などが教えられている。小さい子どもたちは

教科書を使わない。紙を切ったり、絵を描いたり、土をこねて何かを作ったり、またためになる話しを聞くなど、いろいろな方法で教育が行なわれる。粘土で富士山や隅田川を作ったりして地理の授業が進められる。節をつけて歌を歌うようにして大きな町の主な場所の名を覚える授業もある。子どもたちが粘土でこしらえた作品や描いた絵を見ると感心するばかりだ。

あるクラスでは3〜4才の子どもたちが紙と筆で絵を描いていた。その小さな手が作り出す作品は一見の価値がある。一方では庭で勉強している生徒たちもいる。別の所では女学生たちが化学について議論している。ガラスのパイプにガスを入れたり抜いたりしての学習である。生徒たちは礼儀作法、失礼のない話し方、控えめに振る舞うこと、目上を敬うことなどを教えられる。日本人同士が互いを敬って話すところを見ればその礼儀正しさがよく分かる。例えば子どもたちは、朝起きると父母に対して、またお互い同士で頭を下げて朝の挨拶をする。寝る時や他の時でもこうした挨拶をする。ただし挨拶の言葉はその都度異なる。近所の人と会えば挨拶をする。誰かが訪ねて来れば膝を折った姿勢で丁寧に迎える。自分がへりくだることで礼儀正しさを表わすのだ。何を言う時にも感謝の言葉を添えていると言えるほどだ。何か恩恵をこうむれば頭を下げて感謝の気持ちを表わす。話す時にはあくまでへりくだって相手を敬う。別れに際して挨拶をすれば、またおいでくださいという言葉を添えて別れの挨拶が返ってくる。

日本では男女とも字を知らない人は極めて稀である。政府の努力により、誰もが8歳になれば学校に行かなければならない。それ以前はほとんどの場合、母親が子どもたちを教育している。……

日本人は自分を高めるためには、どんなに卑しいとされる仕事も厭わない。ある新聞で読んだ話だが、日本の大学で勉強中のインド人の学生が、ある日帰宅途中で雨に降られて濡れながら歩いていたところ、人力車が寄ってきて乗っていくかどうかを尋ねた。何とその人力車夫は学生の日本人の同級生だった。それに気づいてインド人学生が何か言おうとすると、同級生はそれを制し、「俺はただの俥引きだ。それ以上言うことはない。」と言い、インド人が乗りそうにもないと見ると他の客を捜しに立ち去って行ったという。このようなことは日本ではめずらしくない。学生たちは休みともなれば俥を借りてきて引いたり、魚や野菜を配達してまわったりする。(この国では、どんなものでも注文を受けて届けるようになっている。)どの学生も機会さえあればこうした仕事をしている。……

/

女性たちが夫とともに野良で働く姿を頻繁に目にする。市場、店、駅、郵便局、どこでも女たちが働いている。人出で賑わう盛り場でも、女性たちが仕切っている。見世物小屋の切符売りは女である。この国では女を縛るものはなく、女たちは男たちと一緒に働き、行動する。そうすることに何の障害もないし、躊躇もしない。

/

……そもそも日本では誰も裸でいたり裸足だったりすることはない。服装はずいぶん洗練されている。しかし、入浴の時だけは、公共の浴場でも皆一斉に裸になって入浴することを恥ずかしがらない。それどころか、下男に1〜2パイサやって体を洗ってもらうことまでする。清潔さに細かく気を使うことで、健康を維持するのだ。

/

日本では誕生や死に際しては祈祷などの宗教行事が行なわれるが、結婚の時にはそういったものは一切ない。これは日本人が結婚というものを肉体的な結び付きと考えているためだ。だから結婚の際には、これを楽しめばいいのであって、他に精神的な行事を執り行う必要はないというわけだ。だが時折、夫に先立たれた妻が腹を切って後を追うとか、髪を下ろして尼となり、夫の思い出に浸りつつ永遠の出会いを願う、といったことはある。……

/

日本には仏教と神道がある。今ではキリスト教の信者も多い。仏教は全くブッダの開いた宗教そのままというわけではない。誰もが神道の影響を受けている。他界した偉人、英雄、霊魂を日本人は神として祭っている。こうした人たちは危機や困難、あるいは戦争の際に味方となって助けてくれる。日本人は天皇を神として崇めている。戦争などの困難な時、天皇の聖なる力とその優れた資質、それにあの世に住む霊魂たちの祝福と手助けによって、その困難を乗り切ることができると日本人は考えている。

亡くなった英傑のための祭りが盛大に催される。これを「ショーコンシャ」と言う。男神、女神を祭った神社もある。仏教徒、神道の信者を問わずお参りをする。亡くなった人たちへの敬愛、天皇への尊崇、自国への愛、仕事への献身、これが日本の宗教だ。……

/

この国の人たちの、私へのもてなしぶりには驚くしかない。義母を始め親戚の人たちは、私が辛い思いをしないようにと常に気を配ってくれていた。私のことはすべて姑がやってくれた。私が井戸の所でちょっと水を汲んだり、衣類を洗おうとしたりしていると、義母が奪い取るようにしてその仕事をすませてしまう。私が困ります、と言えば「この寒さに辛かろうし、病気にかかってしまうから」という答えが返ってくる。もう60才になるのに、私などが2〜3人かかってもかなわないほどの量の仕事をこなす。……私が外国人だからと忌み嫌ったりするどころか、私が楽しめるようにと皆が常に気を使ってくれていた。婚家ばかりでなく、どこかに招かれて、あるいは用事があって行った時でも必ず、外国人ということで皆が私を見に来たし、私の国のことを熱心に聞きたがった。私たちをどうやってもてなすか、なかなかまとまらなかったということだった。できる限りのことはしたのだけれど、きっと辛い思いをしたり不便をかこったりしているのだろうね、何とも申し訳ない、と謝られたりした。ともかく、この人たちの外国人へのあたたかい心配りには、感嘆せずにはいられない。……

……法事の前に知らせが回されたので、おおぜいの人が特に私を見にやって来た。あまりにもたくさんの人が集まったので、法事の後寄付を募ったところ、それぞれが出したのは少しずつでも、合わせると15〜6円(23〜24ルピー。1.5ルピーで1円)にもなった。このお金はお寺に寄進された。皆が私を見たがったせいでできた人だかりの中にいるのが辛くなったのだが、義弟がそれに気づいて、人垣を押しのけて私を家の中に引っぱって行き、部屋の戸を閉めて人目から閉ざしてくれるという一幕もあった。それでも私をぜひ見たいという人たちが、2〜3分でいいから姿をあらわすようにと言ってきた。これ以降、どこかで法事な

どする時には、人をたくさん集めるために私が招かれることがよくあった。外国人をめったに見ることのないこのような村や町では、道を歩くだけで大変な思いをした。なにしろ、無数の人が私を取り囲むように集まって来たのだ。

以下の文献から抜粋した。
ホリプロバ・タケダ（富井敬訳）
「あるベンガル婦人の日本訪問記」『遡河』第10号（1999年、遡河編集部）
「あるベンガル婦人の日本訪問記（続編）」『遡河』第13号（2002年、遡河編集部）
翻訳加筆修正：渡辺一弘

友情のセノグラフィ

スヴェトラーナ・ボイム

私たちが生きているのは、友人を［SNSで］追加する世界であって、友情（友愛）の世界ではない。友人はおおむね友情以上の何かを示す婉曲表現になった。「友人」とは、ホームページを埋めつくす目立ちたがりの知り合いか、あるいはそこを避けようとする、目立たない恋人のことだ。

友情という言葉は、英語では自由〈freedom〉、ドイツ語では喜び〈freude〉、ロマンス諸語とギリシア語では、友愛（情動的な愛）〈philia〉という語源に由来している。ロシア語では「友人」を意味する〈drug〉という言葉は、「他者」と関係しているが、外国人という意味の他者ではない。それには〈inoi〉という別の言葉があるからだ。他者性という側面が重要なのは、友情にはないものがたくさんあるからである。私の理解では、友情は、慣習的な親密さではなく、男たちの連帯（ブラザーフッド）や女たちの連帯（シスターフッド）、あるいは人脈づくりの機会でもない。むしろ友情とは、最終的に完了することのない選択的親和性であり、プロットや場所のない社会における関係性であり、それ自身のための経験である。友情は必ずしも民主的または平等主義的ではなく、むしろ選択的であり完全に包括的でもない。

ハンナ・アーレントは真剣な友情こそが人生を生きる価値のあるものにしていると述べている。しかしアーレントはまた「たったひとつのもの」としてのロマンティックな愛――彼女はそれを「二人の全体主義」になりうると考えていた――と友情を混同すべきではないと強調してもいた。それは恋人たちの周りにあるすべての世界を消滅させてしまうからだ。友情は、ルソーが提唱する親密さ、つまり、溢れるナルシシズムのエコーチェンバーでもない。「われわれは友情を単に親密さの一現象としてみることになれてきています。友人たちはこの親密さのなかで世間やその要求に悩まされることなく、相互に胸のうちを明しあうというわけです」。(1) じっさいアーレントにとって、友情とは、正確には世間に悩まされ、同じ

反応を――いわば、存在の次元を拡張し、この世の舞台で共創することによって――返すことなのである。この舞台には、独特の舞台芸術（セノグラフィ）がある。明るく照らされているわけでもなければ、完全に啓発されているわけでもなく、光と影の相互作用によって織りなされる明暗法（キアロスクーロ）のセノグラフィなのだ。

アーレントは「暗い時代」の人々について書いているが、極限の状況においては、光明は哲学的諸概念からではなく、男女が光をともし、与えられたわずかな時間を越えて輝く「不確かでちらちらとゆれる、多くは弱い光」から発するのだと考えていた。「男女がその生まれの如何にかかわらず、互いの閃光を反映しあう」この光明の空間は、私たちが住む現れの世界に光を放つ人間らしさと友情からなる空間である。言いかえれば、友情とは、すべてを明瞭あるいは不明瞭にすることではなく、影と共謀し、戯れることなのである。その目的は啓蒙ではなく光輝であり、盲目的な真実を探求することではなく、不意に出会う明瞭さと誠実さを探求することである。

友情の哲学は古代ギリシアとローマにまで遡る。そこでは、友情は「活動的生活」〈vita activa〉と「観照的生活」〈vita contemplativa〉の両方の要であり、政治の要であり、哲学［それ自体がフィリア（philia）と語源的に関係する］の要だった。これらの哲学は政治的なものと非政治的なもの、世俗的なものとユートピア的なものとのあいだで交替してきたが、ジャック・デリダ、ジャン＝リュック・ナンシー、ジョルジョ・アガンベンによる同時代の分析を含め、これらはすべて主として男性の友情を語っている。女性同士の友情は、なぜか哲学的な重み〈gravitas〉が欠けていると思われているのだ……。

ハンナ・アーレント自身とメアリー・マッカーシーとの意外な関係がもたらすのは、これらの問題を詳細に検討する方法である。二人の女性は情熱的に非婉曲的な仕方で友情を理論化し実践したが、彼女たちは一連の表現でしか説明できないタイプの関係をもっていた。その表現がもつ撞着語法的な特徴によって、私たちは二人の情熱の核心には達するが、ほとんど抑制することのない彼女たちのあけすけな感情的告白の様式をみることはない。それは、明光な不透明さ、ディアスポラ的な親密さ、非対称的な相互関係、無作法な機転、同性愛的な異質性だ。

/

マッカーシーとアーレントのような二人の友人が世界について語るとき、語っているのは誰なのだろうか。手紙を読みながら、私たちは声の多様性に感銘を受ける。優しい気遣い、相手の存在に対するせっかちな要求、悪戯や遊び心、鋭い知的観察、哲学的議論。言いかえれば、親しい友人、作家、政治評論家、哲学者、冒険家の声だ。友情からなるこの世俗的な空間だけが、労働、規律、あるいは社会的役割のどの区分にもあてはまらない自由の豊饒さを可能にしているのである。

友人たちといると、ひとは複数の対話に参加し、独居（solitude）を分かち合うことができる。アーレントは、独居（solitude）と孤独（loneliness）は違うと述べている。というのも、私たちは独居のなかでは自分自身や世界と対話しているが、孤独は私たちを孤立させ、口ごもらせてしまうからだ。独居を経験するとき、私たちは自らの内面の舞台でギリシア人が「ダイモン」と呼んだものと遊んでいる（悪霊（デーモン）と混同しないようにしよう。ダイモンは目に見えない私たち自身の声なので追放されるべきではない）。あなたが真の友人と話をするとき、彼女が見ているのは私たち誰もの肩越しで話しているダイモンであり、あるいは、おそらく私たちのダイモンたちが互いに友好的に向き合っているのだ。一人のよき友人といるとき、私たちはよき多様な仲間である。そのような深い友情のなかで、私たちはいわゆる「真の自己」という閉所恐怖症へと頑なに後ずさりするのではなく、現実の潜在的な自己を増殖し、創造し、発見するのだ。友情は闕を冒険する領域へと私たち自身を拡張するものなのである。

註

（1）ハンナ・アレント『暗い時代の人びと』（阿部齊訳、ちくま学芸文庫、2005年、p.45）

以下の文献から抜粋し、翻訳した。
Svetlana Boym, “Scenography of Friendship,” *Cabinet*, Issue 36 “Friendship” (Winter 2009–2010).
オンライン掲載：
http://www.cabinetmagazine.org/issues/36/boym.php
翻訳：清水知子

16世紀にビージャープル王国で編纂された占星術百科事典『ヌジューム・アル・ウルーム』の著者と意義について

エマ・フラット

1570年8月17日、ビージャープル王国のある写字生が意欲的かつ非常に複合的で贅沢な図版を施した占星学と星の魔術に関する書物を完成した。現在アイルランドのダブリンにあるチェスター・ビーティー図書館に保存されているその写本は、書物の題名ではなく、最初の1葉の書き込みにある「ヌジューム・アル・ウルーム（諸学の星々）」として広く知られている。これまで学術的に注目されてきたのは、豊かで荘厳な約400点に及ぶ図版である。そこに描かれているのは、驚くほど多様な天使や擬人化された惑星、黄道十二宮や（宮の下の）「度」、護符、魔法の呪文、占星の図やホロスコープ図、タントラの女神、馬、象、そして、武器 …… といったものである。

/

本書の序章でも明らかなとおり、アリー・アーディル・シャー（本書の筆者と思われる）は本書を宮廷の貴族たちの教育のために編纂している。また、近しい友人を励ますことからこの百科事典的な書物を着想した、とまで述べている。

> 十分に手引きと導きを得て啓蒙された者にとっては明白で疑問の余地もないことだが、誠実な仲間で愛情深い友人たちが私のような人間に求めたのは、天文学、神秘主義、魔術と手品などの諸学に関する本書の各章に、いくばくかのことばを加えることであった。

> さらに、本書が植樹、医術やそれに類する諸章を語り、見えない神秘と心の秘密を打ち明けられる腹心の友人となり、そして［知識を］探求する人々の指南と導き手になることであった。このような人々が私に懇願し折り目正しい要請をした結果、これ以上の完成度はないと思われる水準のものに達した。そこで、卑しく慎み深い私は、人々の求めに応え、高貴なるものに従ったのである。諸々の薬が人々の命をケアするように。

/

序章に続いて本書に収められている52の章のタイトルが列挙されている。第53章は空欄のまま残されている。これらの章の大部分は現存せず、また実際は完成しなかったのかもしれない。しかし、目次に挙げられている技術と知識の幅広さを見る限り、ビージャープルのコスモポリタンな宮廷文化の様子と宮廷に仕える者が身につけるべき多様で高度な技術がうかがえる。象、詩の知識、音楽、修辞学、医術に関する技術、さまざまな国の女性や男性にかかわる事柄から愛の形と天使の性質まで、あるいは造園、錬金術、調理、狩猟からレスリング、香水、火薬づくりまで、さらにはスーフィー、ヨガ行者、儀礼的賛歌からスパイの行動、信じられないような珍しい出来事、さまざまな動物肉の質など。アリー・アーディル・シャーはこの余すところのない目次の一覧のあとに、この書物の本来の目的について注意を喚起している。

> これらの言説の断片が知的な者たちに美しく映し出されること、そして、これを購入する者には良質で称賛に足るものであることを願う。…… しかしながら、その後は、本書全体の本来の目的と意図は先に書いたとおりであることを隠しておいてはいけない。ここには、諸要素から創造されたもの、天体、植物、鉱物、動物、天界にいる数々の天使たちと数珠のようなそれらの名前、天のあらゆる星々の本質でもある有益性の解明などの話がある。

以上のようなことばに加え、冒頭で本書が「人々（訳註：近しい人）の命をケアするための薬」であるとあらわしたように、アリー・アーディル・シャーは変革をもたらす知識の力を一貫して信じていたのである。

『ヌジューム・アル・ウルーム』の目次(1)

第1章　7つの天国と天使、
神の座の天使、
黄道十二宮などの解説

第2章　7つの惑星と惑星が昇る位置、角度、
インドとホラーサーンの暦による年ごとの調整の説明

第3章　地球の特徴、
120の占星図とその力および力に打ち勝つこと、
ヨギーニの84の形式の解説

第4章　珍しい出来事、
そのしるしとそれらを回避する方法の説明

第5章　馬、
馬の状態、
病気の解説

第6章　象、
発情期の象の死、
象の状態と病気の説明

第7章　音楽、旋律、旋法、
108のリズム、
それぞれの長所と短所、
16番目の文字、
7つ目の音符とその産物と産物30個の名前の説明

第8章　神秘的な旅、
瞑想、
エクスタシー、
奇跡、
スーフィーから与えられた14軒の家。
エクスタシー、エクスタシーのランクと行動の説明

第9章　36の戦争用武器の説明、
それぞれの品質、特徴、機能についての説明

第10章　ヨギーの12のセクトに関すること、
セクトを区別する記号、
禁欲行為と行動の解説

第11章　予言とよい前兆の説明

第12章　種まきと造園の説明、
東風と東風が原因で発生するペストのための薬の説明

第13章　古代の賢人の実験の説明、
護符、
計算と事象の位置の説明

第14章　医術、病気、痛みの説明、
簡便な治療薬と複合的治療薬、
病気の原因、
万病をインドとペルシャの万病のシステムをもとに区別する
方法の説明

第15章　インドとホラーサーンのレスリング、
技、流儀と礼儀の説明

第16章　男性の4分類、
女性の4分類、
それぞれの特徴、
区別するための記号、
座り方の説明

第17章　火薬の説明と種類、
火薬の作り方の説明

第18章　儀礼的賛歌、
祈禱、
アラーの名前、
祈りに応えることとその方法、時間、
その起源の説明

第19章　ペルシャとインドのシステムによる呪文、
その効果、性質、
星の予知力、
狼煙、献酒の説明

第20章　宰相（ワズィール）と地方太守、護衛官、スパイに対する
スルタンの態度、
礼儀正しい行為、
策略、背信行為、正義、戦争、
スルタンの位のあり方の説明

第21章　動物の肉の種類、
効果、特質の説明

第22章　全能の神と真実が各都市に与え、授けた奇跡の説明

第23章　元気を回復するための治療に対する意識、
実現、実践、状況、効果、
名前の説明

第24章　香水の作り方、
方法論、
種類と性質の説明

第25章　gutkhaの起源、錬金術、
性質に反する行為を人に強制すること、
文学、天体の力、
精霊（jinn）の従属、
ジオマンシー（土占い）、
それらの起源のそれぞれの解説に関する説明

第26章　［呪文により、］人を殺す、人を追い払う、
人が行動や発言する力を奪う、
人を幻想で惑わせる、
人を盲目にする、人を聾者にする、
魔術、大魔術、
口実の説明とそれらの行為の解説

第27章　悪魔に憑かれる、khalatを回避する、
忠誠と守護の施しに関する説明

第28章　毒を拒絶すること、
毒の種類、原因、
毒の見分け方の説明

第29章　狡猾さの発端の説明

第30章　動物の狩猟方法とその名前と準備の説明

第31章　いろいろな場所から集められた薬草の作用の解説

第32章　夢の解釈の説明と真実と偽りの夢の説明

第33章　人の多様性と70種の分類とそれぞれの宗派、
主義、信仰の説明

第34章　愛、愛情の深さと愛情の種類の説明

第35章　階層ごとの人、社会、友情の行為の説明

第36章　貴賤上下のそれぞれの位の者を召喚する際のインドの方法と
ホラーサーンの方法の説明

第37章　詩の韻律、リズム、
その他詩に関するいろいろなことの説明

第38章　宝石と宝玉の種類の見分け方、
宝玉の効果と価値、宝石の印象の説明

第39章　言語の法則の説明と通年行われる儀礼とそれに必要なもの、
祝祭、機能などの説明

第40章　クルアーンにある預言者と天使ジブリールのことばとその解釈、
および男の知識とそれに関係することの説明

第41章　算数の法則、
掛け算、割り算、
算数に関係することの説明

第42章　話しことば、
文法、理論、神学、
修辞学などの説明

第43章　天文学の説明

第44章　アストロラーベ（天体観測用機器）の説明

第45章　体力、体力の要因と効果、
男の体力低下と治癒の説明

第46章　人相学と魔除けと護符の作り方の説明

第47章　最初の預言者アーダムと最後の預言者ムハンマドまでの
イスラームの預言者の系譜の説明

第48章　寓話と伝奇の説明

第49章　アラビア語、ペルシャ語、トルコ語、ヒンディ語、
サンスクリット語、フランク族のことば、カンナダ語、
テルグ語、トゥグラ文字などの文字とことばの説明

第50章　珍味、シャーベット、ハルヴァ、
砂糖菓子などの説明

第51章　商人と職人の技能の道具やわざの説明

第52章　記述の知識と記述に付随するペンを磨くことや
インクを作ることなどの説明

第53章　［空欄］

編註
(1) エマ・フラットによる目次を本ソースブック転載にあたり、編集した。

以下の文献から抜粋・編集し、翻訳した。
Emma Flatt, “The Authorship and Significance of the Nujūm al-ʿulūm: A Sixteenth-Century Astrological Encyclopedia from Bijapur,” *Journal of the American Oriental Society*, Vol. 131, No. 2 (April–June 2011), pp. 223–244.
翻訳：帆足亜紀
翻訳監修：矢野道雄

Description of the original manuscript
Date: 1570
Dimensions: H261 mm x W169 mm x D55 mm
Material: paper, pigment, ink
Language: Persian
Script type: Nasta'liq script

Illustrations excerpted from *Nujūm al-'ulum* (Stars of the Sciences), Chester Beatty Collection
Courtesy of Chester Beatty, Dublin
©The Trustees of the Chester Beatty Library, Dublin

In 02, folio 213r

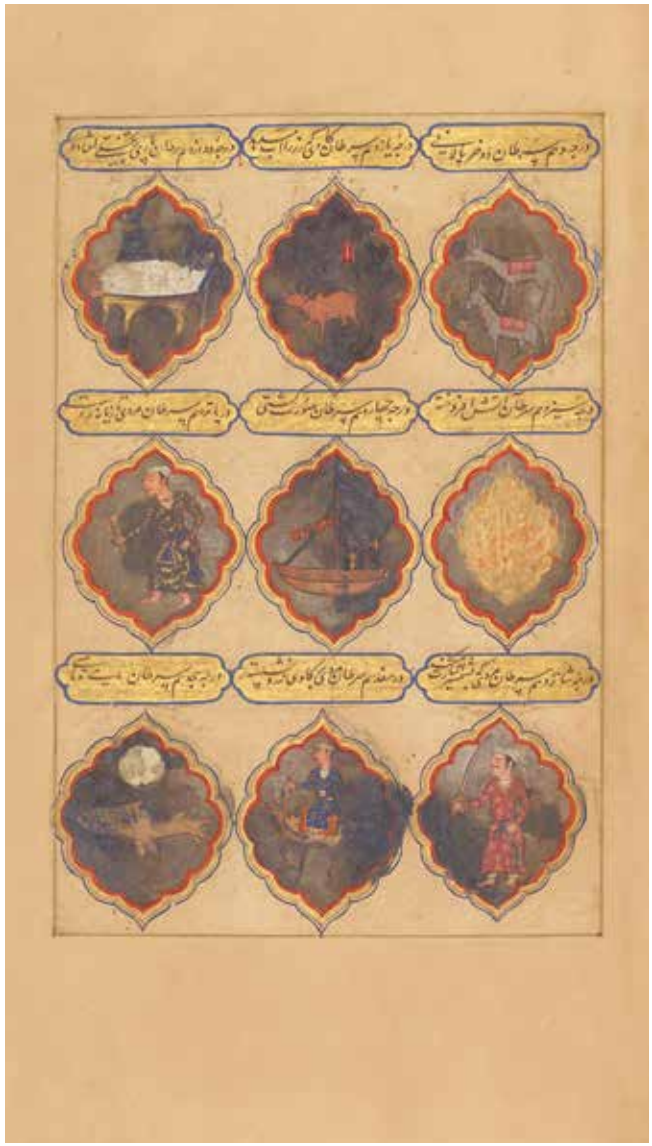
In 02, folio 5v

In 02, folio 7v

In 02, folio 11r

In 02, folio 54r

In 02, folio 24v



In 02, folio 26r

In 02, folio 183r

In 02, folio 240v

In 02, folio 202v

In 02, folio 1r

光に導かれて
——クラゲ、GFP、そして思いがけぬノーベル賞への道

下村脩
下村幸
ジョン・H・ブリネガー

目次

献呈の辞 v
序文 vii

プロローグ 1

第1章 幼少期：満州、佐世保、そして開戦 5
1.1 福知山から佐世保へ 5
1.2 下村家の家風 8
1.3 満州にて 12
1.4 佐世保再び 15
1.5 大阪にて 20

第2章 祖国が戦火に巻き込まれる：大村海軍航空廠と原子力爆弾 23
2.1 諫早中学校で学徒動員 24

たった1日先の運命さえも予想できないような不安定な状況で、学校での勉強をどうするかなんて誰も考えていなかったのだろう。だから私は毎日、稼働し始める前の工場に行った。そしてもし何もやることが見つからなかったら、と言ってもそんなことは頻繁にあったが、よく近くのサツマイモ畑の中で寝転がって、大きな隊形を組んだB-29爆撃機の群が東に向かって、多良岳のはるか上空を飛んでいくのを見ていた。秋の青空を背景に銀色に輝くB-29爆撃機は、見ていて美しかった。爆撃隊が通り過ぎてから10分ほどした後に、有明湾の対岸にある大牟田工業地帯から黒い煙が上がるのをよく目撃した。そこで起きているであろう大惨事の様子はただ想像することしかできなかった。

北から南へ、ここから数十マイル（15キロくらい）離れた長崎に向かって一機のB-29爆撃機が飛んでいるのを見て、いつもとは違う飛行ルートだったので不思議に思った。その爆撃機から2、3個のパラシュートが落とされ、まばらな銃声が数発聞こえた。じっと目を凝らしてパラシュートを見ていたが、人がぶら下がっているのは見えなかった。そして数分もしないうちに、別のB-29爆撃機が同じルートを辿って最初の爆撃機を追いかけていたところ、空襲警報解除のサイレンが鳴り響いた。

私たちは作業を再開するつもりで工場の中に戻った。椅子に腰を下ろした瞬間、工場の小さな窓から入ってきた強烈な閃光が私たちを襲った。30秒ほど、眩しさのあまり何も見えなくなった。そして、閃光から40秒ほどたった後だっただろうか、大きな音が聞こえて、急激な気圧の変化を感じた。どこか近くで大きな爆発が起きたに違いなかったが、それがどこなのかはその時はまだわからなかった。

空にはみるみるうちに暗雲が立ち込めてきて、私が工場を出て帰路に就いたころには霧雨が降り始めていた。灰と水、そして放射性降下物が混ざった黒い雨だった。1時間後、家に着いたときには白かったシャツは完全に灰色に染まっていた。祖母は私を見るや否や汚れを落とせるように風呂を沸かしてくれた。黒い雨の放射性降下物のせいで放射能中毒になってしまうところだったのを、あの風呂のおかげで免れたのかもしれない。

2.3 戦争の後：手探りの未来 29
2.4 戦争の後：失望 32

第3章 もがきながらの学び：長崎、名古屋、そしてルシフェリン（1948－57） 35
3.1 旧制長崎医科大学附属薬学専門部と長崎大学 35
3.2 平田研究室とウミホタルのルシフェリン 41

平田研究室での初日、平田（義正）教授は大きな真空デシケーターをどこからか持ってきて、「ここにあるのは乾燥ウミホタルだ」と言った。ゴマ粒大の甲殻類が入っていた。そして教授は、ルシフェリンという有機化合物とルシフェラーゼという酵素の反応によってウミホタルが発光すること、ルシフェリンが極めて不安定な物質で酸素があると分解してし

まうこと、米プリンストン大学のニュートン・ハーベイ教授がルシフェリンを精製しようと過去20年間努力してきたものの、構造の研究ができるほどの純度の高いルシフェリンを得られていないことを説明した。ハーベイ教授は1916年にハネムーンで来日し、ウミホタルが生物発光のいい研究対象だと考えた。以来、教授は日本から入手できる試料を使って研究を続けていた。

3.3　予想外の成功：ルシフェリンの結晶　46

どんなに頑張ってもルシフェリンの結晶を得ることができず、私はルシフェリンの抽出と精製を一ヶ月に一度のペースで続けていた。しかし1956年の2月のある寒い日、偶然ルシフェリンを結晶化できた。

その前夜、私はいつもようにルシフェリンの結晶化に挑戦していて、精製したルシフェリンはまだ少し残っていたものの、夜10時ごろには実験のアイデアも尽きてしまった。そこで残ったルシフェリンはアミノ酸分析に利用することにした。試料に同量の濃塩酸を加えた。黄色の試料は瞬時に深い赤色に変わった。まだオーブンの準備ができていなかったので、試料の加熱は翌朝にしようと考え、深い赤色の溶液を棚に置いたまま、帰宅した。翌朝、研究室に戻ると溶液は無色になっていた。試料の加水分解が起こったかと思ったが、よく見ると試験管の底に黒い沈殿物がほんのわずか溜まっていることに気付いた。顕微鏡で見ると、この沈殿物が赤い針状の結晶であることが観察できた。

ルシフェリンの結晶化の成功は、偶然の産物だった。しかし、プリンストン大学の研究者らができなかったことを成し遂げたことで、終戦以来暗い先行きしか思い描けずにいたのが、希望が芽生えた。あまりにも嬉しくて、数日間眠ることができなかった。だがおそらく、この時に得た最も大きな収穫はどんな困難でも努力すればいずれ解決できるという自信がついたことだろう。

第4章　渡米と帰国：結婚、プリンストン大学、そしてイクオリンとGFPの発見　51

平田研は、とてもいい雰囲気の素晴らしい研究室だったと記憶している。誰かに何かを正式に教えてもらうということはなかったが、周囲の人を

観察することで多くのことを学び、そこから自分でさまざまな技術を生み出すことができた。たった一度だけ、平田教授がアドバイスをくれたことがあった。「下村さん、質量分析でわかるのはおおよその分子量ではなく、正確な分子量なのだ」。だがどんな状況で教授がこのような指導をしてくれたのかはもう忘れてしまった。

4.1　明美との結婚：日本からの出発　53

1960年8月27日、私は200人以上のフルブライト奨学生とともに横浜で定期船の氷川丸に乗船し、シアトルに向かうことになった。その日は私の32歳の誕生日だった。そして結婚したばかりだった。氷川丸の最後の北米航路シアトル線の航海でもあったため、埠頭は見送りの人で埋め尽くされていた（氷川丸は30年前に初めてシアトルへ航海し、戦時中にほかの姉妹船は破壊されてしまったものの病院船として戦火をくぐりぬけた）。私の新妻、妻の母、そして友人たちが見送りの人たちの中にいた。船の乗客と埠頭の人たちを何千もの華やかな色のテープが繋いでいた。船が動き始めると無数のテープが切れていき、海の中に落ちていく色鮮やかな光景は、一生忘れられない。

4.2　プリンストン大学へ　59

（フランク・F・）ジョンソン教授の部屋を初めて訪れた時、白い粉が入った小さなガラス瓶を見せられた。「これはオワンクラゲという発光クラゲの発光組織を凍結乾燥したもので、水と混ぜると発光するはずだ」と教授は説明した。一緒に暗室に行って試してみたが、光を確かめることはできなかった。それでも、教授はワシントン州のフライデー・ハーバーという港の海にオワンクラゲがたくさん生息していて、いかに美しく光っているかを熱く語った。そしてこのクラゲの発光の仕組みを研究することに興味はないかと聞いてきた。クラゲについては何も知らなかったが、また新たに発光生物の研究を始めたいと思っていたところだったので、「ぜひ取り組みたい」と答えた。そして翌月の6月にフライデー・ハーバーまで一緒に行くことになった。

4.3　フライデー・ハーバー　65
4.4　オワンクラゲ　71

オワンクラゲは実に大量にいた。早朝と夕方には、潮の満ち引きによって起きる潮流に乗って漂うクラゲが臨海実験所の桟橋の横を流れていった。私たちは比較的大きいクラゲを1つずつ、傷つけないように浅い網を使って慎重にすくい上げてはバケツの中に入れていった。オワンクラゲの標本はほぼ透明な半球型の傘のような形をしていて、外周に沿ってかすかに発光する線がある。平均的な標本は直径7－8センチメートルで、重さは約50グラムになる。

オワンクラゲは刺激されると傘の縁に沿って光を放つので、暗闇の中で緑色の輪が光っているように見える。発光組織は縁に沿ってしか存在していないため、私たちは傘のヘリの部分を切り取って幅2－3ミリメートルの細長い切れ端を作り、これをリングと呼んだ。そしてこのリングを実験に使った。約30個のリングをガーゼの中で絞り、長時間弱い光を放ち続ける濁った液体を集めた。

私はよく、誰にも邪魔されないように夏の澄んだ空の下で海に漂う手漕ぎボートに乗って考え事をした。当時はフライデー・ハーバーの周りの海を行き交う船は少なく、また、手漕ぎボートはあらゆる動力付き船よりも航行が優先されたため、フェリーなどはいつも大きく迂回してくれた。だがうっかり居眠りをしてボートが潮に流されてしまうと、桟橋まで戻るためには長時間自分で漕がなければならなくなった。ある午後、ボートの上で突然ひらめいた。それは、「クラゲの発光にルシフェリンやルシフェラーゼが関わっていないとしても、何か別のたんぱく質がおそらくこの生物発光の反応に絡んでいるはずだ。それならば、そのたんぱく質の作用は周囲のpH（酸性度）の変化に影響を受けるはずだ」というごく単純なアイデアだった。

発光している溶液を流しに捨てた。するとすぐに流しの内側がいきなり青く明るく光った！ 流しの中には海水が流れ込んでいたので、海水がこの反応を引き起こしたに違いないと推測した。海水の成分はよく知られているため、この突然の発光はカルシウムイオンが引き起こしたのだとすぐに特定できた。ちょうどいいタイミングで流しの中に海水があったのは、本当に幸運だったとしか言いようがない。

4.5　慌ただしかった1962年：GFPの最初の痕跡の発見　74

イクオリンをカラムクロマトグラフ法によって精製しているときに、イクオリンよりも早く溶出して緑色の蛍光を出す別のたんぱく質を微量見つけたので、このたんぱく質も精製した。これこそが今では緑色蛍光たんぱく質、つまりはGFPと呼ばれ、知名度も応用例もイクオリンをはるかに凌ぐようになるたんぱく質だった。

4.6　バミューダのファイヤーワーム　77

1962年8月10日、私たちはゴカイの一種のファイヤーワーム（オドントシリス）を研究するためにバミューダ諸島に飛んだ。ファイヤーワームは体節がある海生のミミズのような生き物で、交尾や繁殖の時に発光することが知られている。メスの緑色の光がオスを引き寄せるのだ。クリストファー・コロンブスの探検隊が1492年にバハマを航海したときに見て、船乗りたちが陸地が存在する証拠とした光は、この生き物が放った光だったかもしれない。

発光ゴカイは長さ1－2センチメートルのミミズ状の生き物で、海水の表面に上がってくるのは満月の後のほんの数日間だけで、それも日没から1時間後のわずか数分間だ。緑色の光を放つメスが先に水面近くに現れて、小さな円を描き始める。すると数秒後に多数のオスが現れて、メスをめがけて進む。彼らの活動は光の広がり方が逆向きで海水面全体を覆うようにいっせいに起きる現象だという違いはあるが、まるで緑色の花火のように見えた。

第5章　リスクを伴う努力、生のクラゲ、そして生物発光の謎　81
5.1　再び名古屋へ：1963－65　81
5.2　ニュージーランドの発光ミミズ　83

1965年2月、私はJSPS（日本学術振興会）から研究費を得て、2種類の発光する生物、洞窟に生息する土ボタルのヒカリキノコバエ（アラクノカンパ）と発光性淡水貝（ラチア）を研究をするためにニュージーランドを訪れた。横須賀市博物館（現在の横須賀市自然・人文博物館）の羽根田弥太館長と一緒だった。私たちは香港とシドニーを経由してニュージーランドのウェリントンに到着し、車を借りてオークランドに向かった。

途中、パーマストン・ノースで巨大な発光ミミズを短時間調査し、そこにある有名な洞窟で土ボタルのヒカリキノコバエを見たが、グローワーム洞窟は重要な観光資源であったため、試料の採集は許可されなかった。

5.3　再びプリンストン大学へ：家族が増える　87
5.4　イクオリンが光る仕組み：フライデー・ハーバー　95

なぜ私はイクオリンの研究に時間を費やすことにしたのか？ それを説明するには、生物発光の一般的な原理の理解が必要になる。光を放つ生き物、つまりは生物発光に人類は古代より魅了され続けてきたが、その機能、化学反応、そして進化の道筋についてまだ解明すべきことが多く残っている。化学反応を解明することで、光を発する能力がなぜ、そしてどのように発達したかのヒントを得られることもあり、科学研究や医学研究への有用な応用方法が見つかることもある。

生物発光のプロセスには分子の酸化などの化学反応の中で、エネルギーが明るい光として一斉放出される過程が含まれている。光を放出する分子は「ルシフェリン」と呼ばれ、堕天使ルシファーの名前と同じように「光を帯びた」という意味のラテン語にちなんで名付けられた。「ルシファー」は、19世紀後半に化学用語に転用される前はマッチの一般的な呼び名として使われていた。初期の科学者には、生物発光がマッチやろうそくの着火に似ているように見えたのかもしれない。ルシフェリンは生物によって異なる場合があるが、一方で関係のない生物種が同じルシフェリンを持っていることもある。生物発光の化学プロセスを理解するには、分解または酸化されて光を放つ分子の構造、その分子を生物が獲得した方法（ルシフェリンを生産するより小さな海の生き物の捕食など）、体内での保存場所、光が反応を引き起こしたり、長期間継続させる物質（酵素）、そして反応を引き起こすトリガーについて知る必要がある。反応を引き起こすトリガーは、環境の変化だったり、または発光する生物自身が光を制御するために出すイオンだったりする。多くの海洋生物は発光するが、その理由はよくわかっていない場合が多い。さらに、光の色は蛍光たんぱく質の影響を受けることもある。生物発光のこうした特徴は、まったくの謎として放置されない限り、自然に対する興味深い洞察を与え、有用な応用方法の発見につながる可能性がある。

5.5　クラゲ標本の扱い方　97

1974年、イクオリンによる生物発光とウミホタルの生物発光が同種の化学反応によって引き起こされていると最終的に結論付けた私は、ウミホタル型ルシフェリンの構造を基本として光を放つタイプのイクオリンの構造を描き出した。そして1975年にこのタイプのイクオリンを「セレンテラジン」、アシル化されたAF350を「セレンテルアミド」と名付けた。ここでセレンテラジンの構造を解明できたのは、ウミホタルの発光の背後にある化学反応がすでにわかっていたからだということを強調しておきたい。

5.6　イクオリン以外の研究テーマ：1965－1978　103

1966年から、ニュージーランドの発光性淡水貝のラチアのルシフェリンの構造の解明に私は取り組み、ラチアのルシフェラーゼの特徴についても研究を進めた。

オキアミ（メガニクチファネス）の生物発光を研究するために、1966年8月にジョンソン教授と一緒にスウェーデンのクリスチナバーグ臨海実験所を訪れた。オキアミは長さ2－3センチメートルの小さなエビで、非常に強い青色の光を発する10個の小さな光器官を持っている。日中は海の奥深くに生息しているが、夜になると水面近くまで上がってくる。私たちは同研究所に1ヶ月滞在したが、標本は150体しか採れず、詳しく研究することはできなかった。代わりに美しい海岸を堪能したり、バイキングの遺跡を見たり、観光を楽しんだ。

私たちは、1965年にロサンゼルスで採取した［ツバサゴカイ（キタプテラス）の］試料から生物発光を起こす物質を抽出した。だが抽出物にはおそらく高濃度の核酸が含まれていたため、ヌルヌルとしていて粘り気があり、精製するのが難しかった。やっと精製を終えて、試料をしばらく放置しておくと、今度は試料が自然と少しずつ結晶化していくことがわかった。特性を研究すると、この物質がルシフェリンでもルシフェラーゼでもなく、イクオリンに似た生物発光のたんぱく質であることが判明した。この発光性の発色団がどんな性質のものなのか、今も十分には解明できていない。

ワタセニア（ホタルイカ）の生物発光を研究するために、1970年に名城大学の井上（昭二）博士と日本の魚津を訪れた。そして1974年に再び魚津に行った。井上博士とはとても親しく、後藤（俊夫）博士とも親交があったので、一緒に研究する機会を得られて嬉しかった。ワタセニアは長さ約5センチメートルの深海にいる小さなイカだ。このイカは、卵を産むために4月から5月にかけて海岸近くの浅瀬にやってくる。学名のワタセニアは、このイカの詳細を最初に報告した渡瀬庄三郎博士の名前に由来している。

5.7　発光たんぱく質　108

第6章　ウッズホールのキノコからベルゲンのアカクラゲまで　111
6.1　ジョンソン教授の退職：
ウッズホール海洋生物学研究所（MBL）へ（1977－81）　112

1962年、私たちは緑色蛍光たんぱく質GFPを発見し、1974年にその性質を報告した。そして1979年、ようやくGFPの発色団を研究できるようになった。

1989年、前年にオキアミのルシフェリンの構造も特定した中村（英士）博士によって渦鞭毛藻のルシフェリンの構造が解明された。

1980年、フランスのマリー・テレーズ・ニコラ博士は私の研究室でウロコムシから生物発光の物質を抽出し、スーパーオキシドアニオンが存在すると光を放つようになるたんぱく質を見つけた。ウロコムシは長さ2センチメートルほどで、全身がウロコで覆われている。賢い生き物で、生存のために環境によく適応している。他の動物に攻撃されると、ウロコムシは自分の体から2、3個のウロコを落として、捕食者の標的になるように光るウロコを置き去りにしながら、自分は他の場所へと逃げることができる。そしてウロコムシは失ったウロコを再生できる。

6.2　ウッズホール海洋生物学研究所にて　115
6.3　努と幸が家を出る　118

私たちは1980年に北米産の発光ヤスデ（ルミノデスマス）の研究を始めた。ヤスデの長さは約2センチメートルで、カリフォルニアのシエラネバダ山脈の標高約1500メートルのあたりに生息し、通常は4月中旬から

5月上旬にかけての雪溶けの直後に巨大なセコイアの木の下の地面に現れる。月明かりがあるとどこにこの発光ヤスデがいるかが見つけにくくなるため、採取旅行はいつも新月の時期を狙って行った。

私たちは当時ニューヨーク州立大学ストーニーブルック校にいたポール・ブレーム博士と共同で発光クモヒトデ（オフィオプシラ）を研究した。クモヒトデは茶色がかっていて、長さ5センチメートルほどの細いクネクネと曲がる腕を5本持ち、ロサンゼルス近郊のカタリナ島の海岸で多く見られる。

6.4 わが友　後藤さん　128

第7章　1990年代：失ったもの、得たもの、そしてGFPの隆盛　131
7.1　ジョンソン博士の他界　131
7.2　日本にいる親戚の他界　133

57歳の時、私は15年後の2000年に生物発光の研究を辞めることを密かに計画した。将来の研究者に向けて、まだエネルギーがあるうちに生物発光に関する本を書いて出版したいと思っていたのだ。そのため、発光キノコの研究を私の最後の主要プロジェクトにすることにした。

キノコを研究しようと選んだ理由の1つは、実に多種類のキノコが家の周りに生えていることに気が付いたからだった。キノコに興味が湧いたのだ。家を建てるために土地を平らにした時からそのまま残っていた樫の根元が、野生種も栽培種もどちらの種類の菌類も育てるのに適していることを発見し、私たちもシイタケを栽培するようになった。土地の手入れをしたり、近くの木々が生い茂る場所を散策したりすると、キノコはあちこちに生えていた。そして中には光るキノコがあることを知った。

GFPは、例えばメダカやネズミ、カエルやウサギといった蛍光を放つように作製された動物の登場で一般の人にもよく知られるようになった。中でも最も有名になったのは、光る動物をアート作品として展示しようとしたシカゴのアーティストの注文を受けて、パリの研究所で生み出されたウサギのアルバだろう。だが一般の人々から批判が巻き起こり、研究所がアーティストにウサギを引き渡すことを拒否した。蛍光メダカやゼブラフィッシュは台湾で生産され、幅広く販売されている。こうした蛍

光動物を作り出すことには、倫理的な課題を含めてさまざまな問題があり、こんな形での応用が人類の幸福や科学の発展に大きく貢献するとは考えにくい。

7.3　純粋な科学の価値　139
7.4　ノルウェーとクロカムリクラゲ　140

発光するクロカムリクラゲは広く世界中に分布している。大きさはだいたい直径数センチメートルでオワンクラゲと大差ない。しかし、ノルウェーのフィヨルドのある地域では、直径8インチ（20センチ）以上、重さも2ポンド（800グラム）近くになるまで育つ。フィヨルドの入り口は狭く浅いため、おそらく外洋とは大きく環境が異なるのだろう。ノルウェーのパー・フルード博士に譲ってもらった標本を使って1996年にこのクラゲの研究を始めると、発光がセレンテラジンとルシフェラーゼによって引き起こされているということがすぐにわかった。ところがこのルシフェラーゼは、非常に比活性が高い、興味深い酵素だったのだ。

第8章　一周まわって元に戻る：自然からの贈り物、科学の世界での栄誉、そして日本再訪　145
8.1　引退後について　145

英国王室顕微鏡学会のピアース賞の受賞記念セッションは、カリフォルニア大学サンディエゴ校で開催された第12回国際組織細胞化学会議（ICHC）（2004年）のプログラムに組み込まれていた。私の講演のタイトルは「the discovery of aequorin and green fluorescent protein（イクオリンと緑色蛍光たんぱく質の発見）」だった。続いて、8月初旬に横浜で開催された国際生物発光・化学発光シンポジウムに招待され、特別講演で「Aequorin & GFP: An historical account（イクオリンとGFP：発見の経緯）」と題して話した。

8.2　自然からの贈り物：オワンクラゲの発生と消滅　148

ここで、オワンクラゲについて、ほろ苦い事実を追加で紹介したい。1961年から1988年まで、私たちはフライデー・ハーバーに19回通い、全部合計すると85万匹ものオワンクラゲを捕まえた。

しかし不思議なことだが、それ以降、クラゲの数は激減しており、1990

年以降はほとんど見ることができなくなってしまい、私たちもほんの数匹の標本を集めるのにも苦労するようになった。クラゲの減少は科学研究のせいではない。直径7－8センチメートル以下のクラゲは効率的に処置するには小さすぎるため、研究のためにはほとんど採取していないからだ。加えて、私たちだけではなく他のクラゲの研究者たちも、大量のクラゲが潮流に流されていくのを定期的に目撃するようになり、大きなものもごく一部しか収集できなくなっていった。突然の急激な減少は、1989年にアラスカの海岸近くで起きた石油タンカーのエクソン・バルディーズ号の原油流出事故による海底の環境汚染、地球の温暖化の進行、あるいは未知の理由が原因なのかもしれない。

第9章　終着点：ノーベル賞授賞の発表とノーベルウィーク　157
9.1　ストックホルムへの出発に向けての準備：文化勲章　158

「……これであなたは、生理学生物物理学名誉教授になります。」ということは、すでに私は数年前に名誉教授に突然なっていたということになる！ その時は特に誰にも気付かれなかったと思っていた私の（ボストン大学からの）退職が、今やこの名誉ある地位に就くという祝事に変わった。しかし、私のこれまでの歩みを考えると、これもちょうど良い形での展開だとも言えるだろう。何しろ日本で最初の博士号を取得した時も、学位を取るために自覚的に研究を始めたというよりも、それまでの研究の成果があってフルブライト奨学生に応募するということもあったため、たまたま与えられた、という状況だった。つまりは私の研究者人生全体がそもそも筋道立っていないのだ。

9.2　ストックホルムへ　164
9.3　ノーベルウィーク開始　166
9.4　ノーベル賞授賞式と晩餐会　170
9.5　ノーベルウィークの閉幕　173

第10章　ストックホルム以後：ロスアラモス訪問、長崎追悼　177
10.1　日本での歓迎　178

名古屋に行った時、平田教授の未亡人と娘2人と一緒に教授の墓参りに行くことができた。墓石の前で頭を下げると、いつもの穏やかな声で微笑みながら、教授が私に話しかけたのが聞こえた気がした、「よくやった」と。

10.2　ドイツのリンダウ市　180
10.3　ロシアでの研究　182
10.4　ロスアラモスからの招待、原子力爆弾が作られた彼の地へ　185
10.5　歴史の断片？　188

忘れもしないあの日、1945年8月9日、私は何か装置が取り付けられたパラシュートを落とした1機目のB-29爆撃機を見た。おそらく爆発のデータを集めるためだったのだろう。2機目が長崎の上空に辿り着いた時、私はすでに建物の中に戻ってイスに座っていた。その瞬間、強烈な閃光に襲われた。もしあのまま空を見上げ続けていたら、おそらく私の目は見えなくなっていただろう。

ここ、ロスアラモスでは、70年前に晴れ渡った青い空を背景に見たあの装置付きのパラシュートと同じものが展示されていた。まるで何も隠し事はないとでも言うかのように、原爆の爆発のメカニズムについての説明が書かれていた。材料さえ揃っていればほぼどこでも作れるかのように読めた。そしてそんな想像をしたことが少し怖くなった。

1945年の長崎では、人々が爆弾の正体がわかるまで何日もかかった。何が起きたのか詳細は公開されておらず、交通機関や通信の乱れもあって被害の規模を把握することでさえ難しかった。後になってからも、これまでは原爆というものは存在しなかったため、人々の怪我の状況や被爆の影響の理解もなかなか進まなかった。被害の全体像がわかっている人は誰もいなかった。半世紀以上が経っても日本では 長期的な影響を調べるためのデータ収集がまだ続けられている。日本に帰国するたびに妻の明美は、爆心地から一定の距離の範囲内にいた人たちの健康状態と既往歴を追跡している医師たちの定期診察を受けることになっていた。

「はたして私たちはどれくらいのことを知っていて、実際のところどれくらいのことを理解できているのだろうか。」科学が恐ろしい驚異を成し遂げたこの地に来て、私は疑問に思った。私たちの訪問について、ジョン・マーコフがニューヨーク・タイムズに記事を書いている（2013年5月12日）。この記事で、パラシュートにつけられた装置について説明をしていた人が、私が実際にその装置が爆撃機から落とされるのを見ていたと知って唖然としていたというピアソン博士のコメントが紹介されていた。これらの展示物は、原爆投下以降の世界に生きる多くの人々だけではなく科学者にとってでさえも、もはや博物館に保存されている単なる過去の遺物でしかないのかもしれない。

10.6　妻の明美の原爆の記憶　193
10.7　科学と戦争：再び長崎へ　198

翌年、私は再び日本に戻った。招待されたイベントのうちの1つは、科学と世界の諸問題に関するパグウォッシュ会議だった。2015年1月に第61回の会議の主催者から招待状を受け取っていた。当該会議は2015年が原爆投下から70周年ということもあって同年11月に長崎で会議を開催することになっており、私はそのことに大いに注目した。「被爆70年—核なき世界、戦争の廃絶、人間性の回復をめざして」とテーマを掲げて、核兵器廃絶を呼びかけた会議だった。パグウォッシュ会議の取り組みは1995年のノーベル平和賞授賞によって広く認められ、核破壊による恐怖のない世界への呼びかけには多くのノーベル賞受賞者も賛同している。

1人で邁進するにしてもそうでないにしても、科学というのは予期せぬ形で世界との繋がりを見出し続けるものだ。この会議の後、私は自分の化学者としての一生にもっともふさわしい結末に辿り着いたと感じた。70年前の長崎の原爆があったせいで化学者としての道を歩み出したわけだったが、このパグウォッシュ会議に参加して、化学者として十分に長い生涯を過ごすことができたということに気が付いた。

第11章　エピローグ　203
11.1　GFPの発見は幸運がもたらしたものだったのか？　204
11.2　私の研究者人生と他の科学者との交流　204
11.3　尊敬する方々　206
11.4　謝辞　207

参考文献　209
索引　211

下記文献から抜粋・翻訳し、レイアウトした。
Osamu Shimomura, Sachi Shimomura, John H Brinegar, *Luminous Pursuit: Jellyfish, GFP, and the Unforeseen Path to the Nobel Prize* (Singapore: World Scientific Publishing, 2017).
レイアウト：ラクス・メディア・コレクティヴ
翻訳：鴻知佳子

ソースの寄稿者

西川紀光（にしかわ・きみつ）
（1940–2015）
横浜で生活し（亡くなった）風変わりな賃金労働者（プロレタリア）。ふ頭や建設現場で働く日雇い労働の世界と貸本屋や居酒屋で長時間夢中でソクラテス的会話をかわす思想の世界を生きる。文化人類学者のトム・ギルとの会話が『毎日あほうだんす――寿町の日雇い哲学者 西川紀光の世界』（2013年、キョートット出版）という書籍に結実し、のちに『Yokohama Street Life: The Precarious Career of a Japanese Day Laborer』[Asia World Series of Publications] (Lexington Books, 2015)として英語でも出版される。

トーマス・パラモア（トム）・ギル｜Thomas Paramor (‘Tom’) Gill
文化人類学者。明治学院大学国際学部教授（横浜キャンパス）。日雇い労働者、寄せ場、ホームレスなど日本社会の周縁に追いやられた人々を研究している。主な著書に『Men of Uncertainty: the Social Organization of Day Laborers in Contemporary Japan』（State University of New York Press, 2001）、『毎日あほうだんす――寿町の日雇い哲学者 西川紀光の世界』（2013年、キョートット出版）など。2011年以降、福島にて原発事故の被災者の実態調査なども実施している。

ホリプロバ・バス＝モッリク・タケダ｜Hariprabha Basu-Mallik Takeda
（1890–1972）
1912年に日本人の夫・武田和右衛門に同行して東ベンガル（現在のバングラデシュ）のダッカより初来日。日本での経験をベンガル語でつづった手記『Bongomohilar Japan Jatra（あるベンガル婦人の日本訪問記）』を1915年にダッカにて出版。1999年にダッカの出版社（Sahitya Prakash Publishers）より復刊される。ベンガル語から英語への翻訳は、デブジャニ・セーングプタによって翻訳された。ベンガル語から日本語への翻訳は富井敬による文章が『遡河』第10号（1999年、遡河編集部）と第13号（2002年、遡河編集部）に初出。本書掲載のため加筆修正した。

スヴェトラーナ・ボイム｜Svetlana Boym
（1959–2015）
生前、米ハーヴァード大学スラブ語と比較文学の教授（Curt Hugo Reisinger Professor）、メディア・アーティスト、脚本家、小説家としても知られる。ハーヴァード大学デザイン大学院ファカルティ・アソシエイト。主に「オフ・モダン」の理論構築の研究に力を注ぐ。主な著書に『Another Freedom: The Alternative History of an Idea（もうひとつの自由：思想のオルタナティヴな歴史）』（University of Chicago Press, 2010）と『The Future of Nostalgia（ノスタルジアの未来）』（Basic Books, 2001）などがある。友情、特にジェンダー、年齢、文化、信念、世代、気質の異なる人の間に生まれるそれをめぐる思想と理想に、知的・感情的に、また情熱的に関わってきたことで知られている。

アリー・アーディル・シャー｜Ali Adil Shah
（1558–1579）
南インドのデカン高原を支配したイスラーム教王朝のひとつ、ビージャープル王国の第五代スルタン。独学者の美学者。美術史家エマ・フラットは『ヌジューム・アル・ウルーム』の著者（もしくは主たる執筆者）だった可能性が非常に高いと論じている。

エマ・フラット｜Emma Flatt
米ノースカロライナ大学チャペルヒル校歴史学部の准教授。南インドのデカン高原のイスラーム教王朝のメンタリティと習俗の研究を専門とする。著書に『The Courts of the Deccan Sultanates: Living Well in the Persian Cosmopolisis（デカン高原のスルタン王朝の宮廷文化：ペルシャ系コスモポリスのよき生活）』（Cambridge University Press, 2019）、『Garden and Landscape Practices in Precolonial India: Histories from the Deccan（植民地以前のインドの庭園と風景：デカンの歴史）』（Routledge, 2011）（Daud Aliと共編著）などがある。

下村脩（しもむら・おさむ）
（1928–2018）
日本の有機化学者、海洋生物学者。アメリカのウッズホール海洋生物学研究所・特別上席研究員、ボストン大学名誉教授。2008年に緑色蛍光たんぱく質（GFP）の発見と開発でアメリカのマーチン・チャルフィー（コロンビア大学）とロジャー・Y・チャン（カリフォルニア大学サンディエゴ校）とともにノーベル化学賞受賞。著書に『Bioluminescence: Chemical Principles and Methods（生物発光――化学的原理と方法）』（World Scientific Publishing, 2006）、下村幸とジョン・H・ブリネガーとの共著に『Luminous Pursuit: Jellyfish, GFP and the Uncertain Path to the Nobel Prize』（World Scientific Publishing, 2017）がある。

下村幸（しもむら・さち）
米ヴァージニア・コモンウェルス大学の英語担当の准教授として教鞭を執る。著書に『Odd Bodies and Visible Ends in Medieval Literature（中世文学における奇妙な身体と目に見える目的）』（Palgrave Macmillan, 2006）、共著に『Luminous Pursuit: Jellyfish, GFP and the Uncertain Path to the Nobel Prize』（World Scientific Publishing, 2017）がある。

ジョン・H・ブリネガー｜John H Brinegar
米ヴァージニア・コモンウェルス大学の英語担当のティーチング准教授として教鞭を執る。研究分野は英語史、中世とルネッサンスの英文学。

※1 名前は掲載順
※2 肩書は2019年11月現在

EPISODOS

エピソードから始まる ヨコハマトリエンナーレ2020

ラクス・メディア・コレクティヴ

私たちはときどき、トリエンナーレと次のトリエンナーレの間には1000日ほどあるという単純な事実を忘れてしまう。私たちはその時間のある部分を通路だと考えたい。そこで（世界じゅうの）たくさんの人々に、今回のトリエンナーレを作りあげるさまざまな力（インパルス）を、見つめ、精査し、興味をもってもらえるようにしたいのだ。対話を広げていければ、私たちは、言説と実践、調査と制作、少数派と多数派、隠蔽と公開の間にある強固な区分をほぐしていけるだろう。この対話は、美術作品とそれをめぐることばが、期待され、受け止められ、伝わっていく過程にしたがって進めていかなければならない。

私たちは、「エピソード（Episōdo）」（日本語を英語表記にしたもの）という短期間のイベントを断続的に行い、こうした対話のきっかけを作りたいと考えている。「エピソード」ということばは、ある時点の出来事に注目したとき何が起きるかを考えるために選ばれている。たとえば、気温が突然変化するのに立ち会ったらどうなるのか？ 明るすぎる空を見上げて日食を観察しようとするとどうなるのか？ あるいは、本来関係のない器械の間に予期せぬ同期が起こるとどうなるのか？

「エピソード」は、以下のようなものの間に網を張っていく。次々に行われる集団での作品制作、素材をめぐる静かな内省と思索、

遠くない未来に向けての組織づくり、音の世界の探究、インフラと廃棄物を隠す硬いうわべについての研究、スポーツにおける息をのむ美技をめぐる好奇心……。そうして「間の時間」、次の1000日への時間を刻んでいくのだ。

「エピソード」に招かれるのは、アーティストやキュレーター、映像制作者、ダンサー、ミュージシャン、パフォーマー、わけても未来学者だ。彼らは打ち解けた集まりの中で実験を行う。そこでは自然発生的に歴史的証言が行われ、はっきりしない話があえて語られ、思想の旅程（アイティネラリー）が推敲され、異なる時代のエコロジー的・歴史的調査に誰もが耳を傾けるだろう。

ヨコハマトリエンナーレ2020の展示はサイトスペシフィックであり、タイムスペシフィックだが、その一方で、「エピソード」は「エピソード」ならではのやり方で、横浜をばらばらで一時的な場（サイト）からなる別々のコミュニティ群との対話に巻き込んでいく。

「エピソード」は、2019年11月に横浜で行われる「エピソード00 ソースの共有」から開始される。イベントは、香港、ニューデリー、ヨハネスブルグに移動し、「ディスカーシヴ・ジャスティス」（とりとめのない正義）に関する対話を始め、2020年7月に開幕するトリエンナーレの期間中、横浜で本格的に展開される予定である。

AFTERGLOW
―光の破片をつかまえる

ヨコハマトリエンナーレ2020

ソースブック

企画：
ラクス・メディア・コレクティヴ

執筆、ソース抜粋・編集：
ラクス・メディア・コレクティヴ

デザイン：アリアナ・スパニエ

日本語版進行・編集補：
帆足亜紀、鈴木慶子

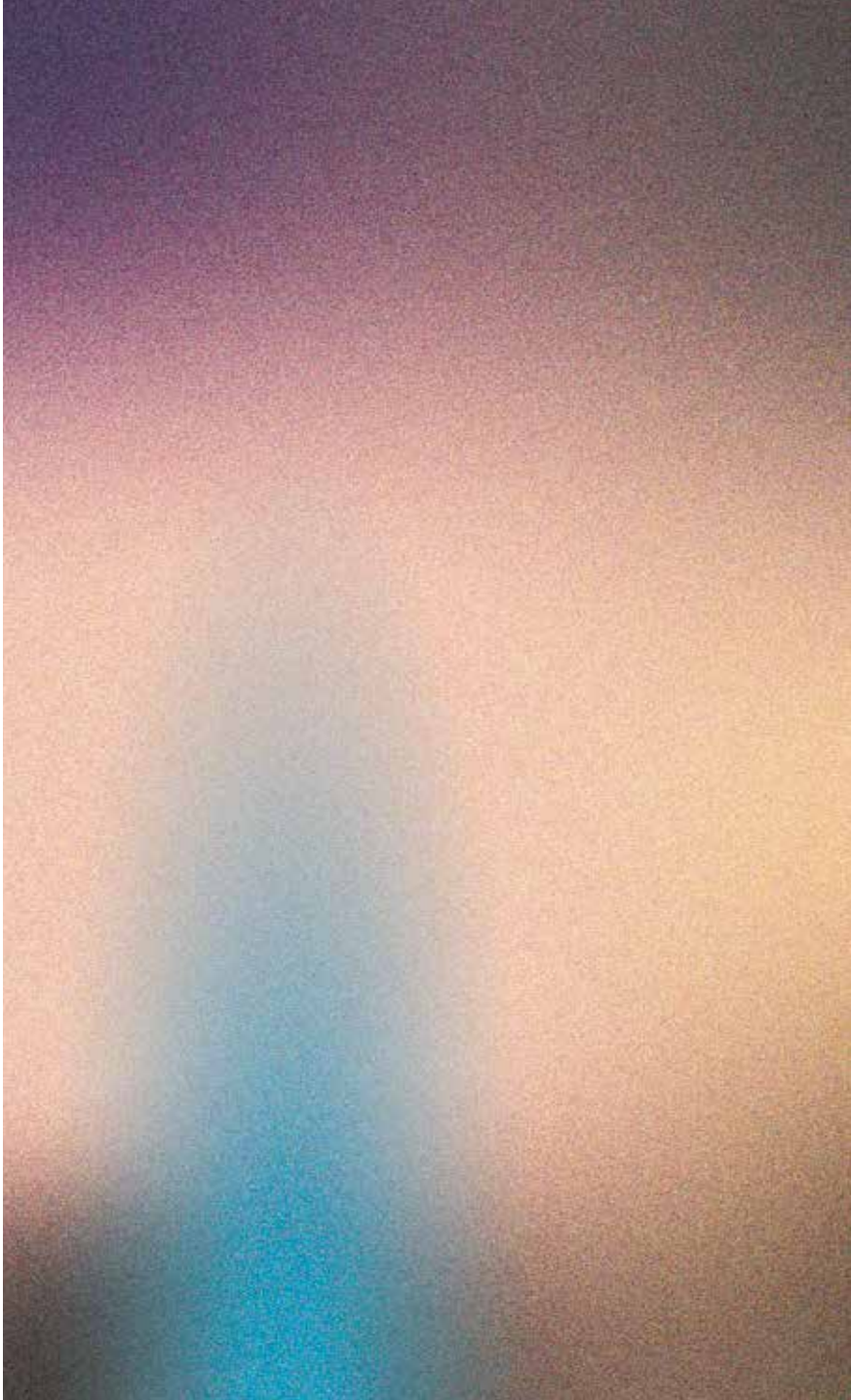
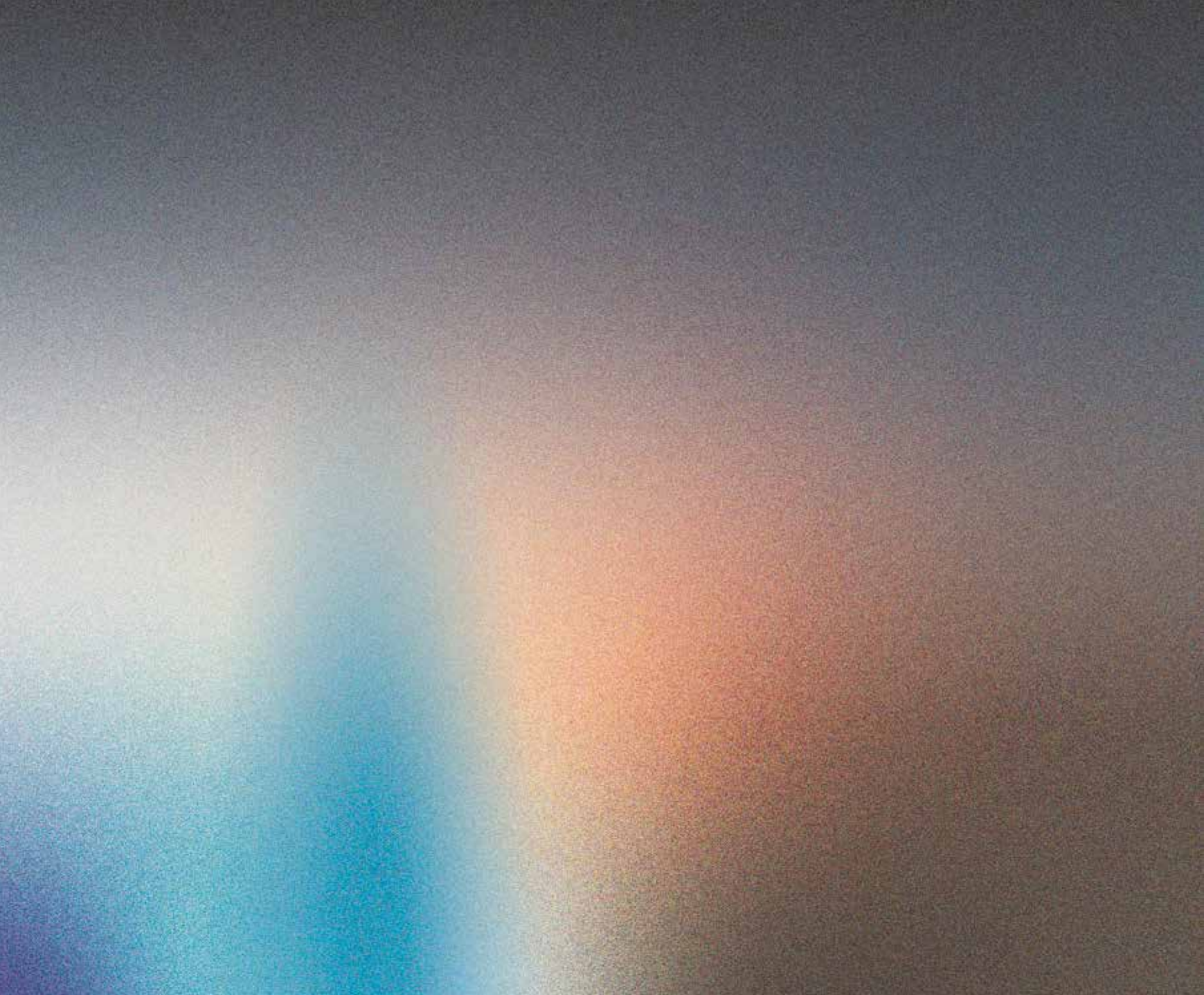
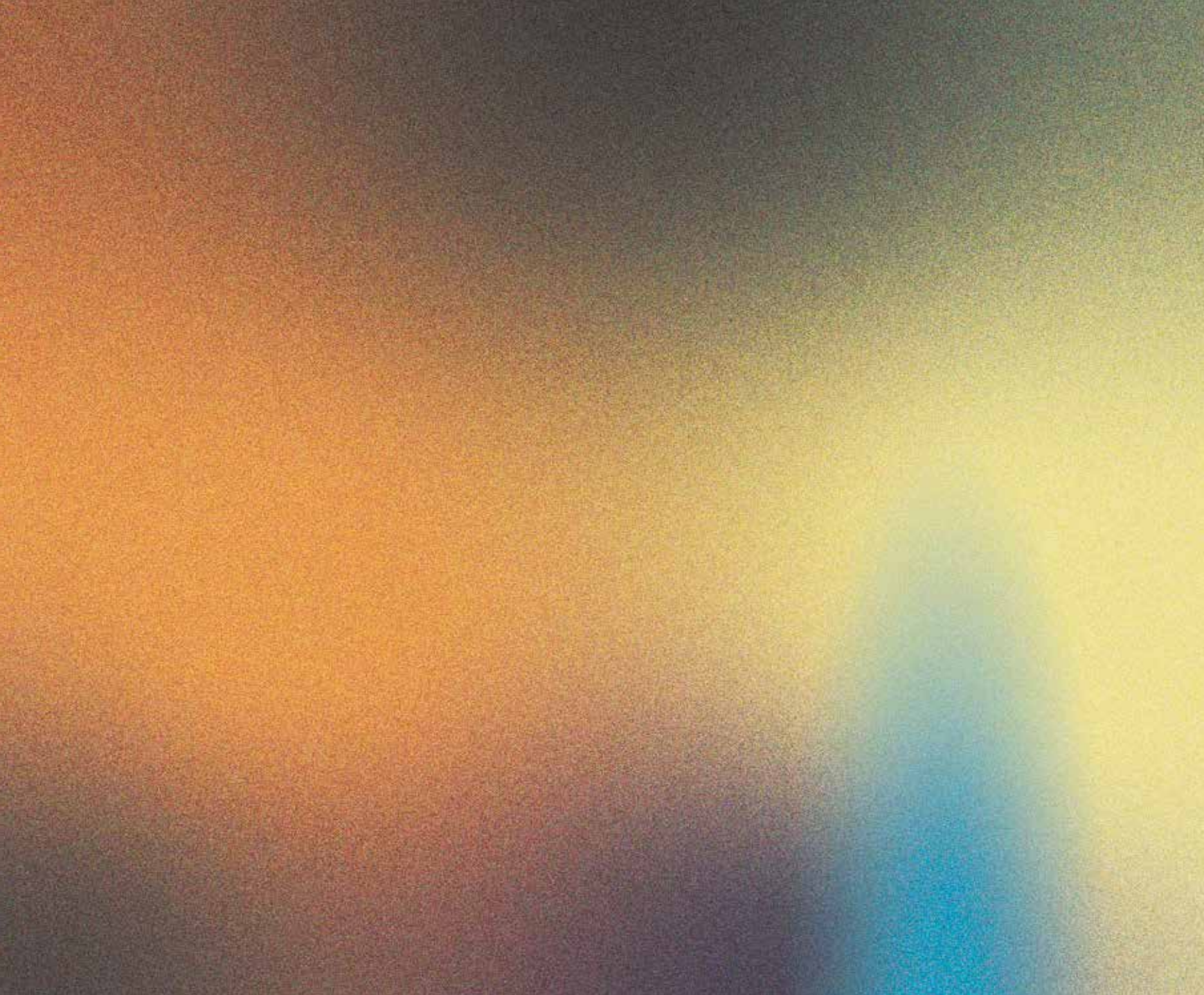
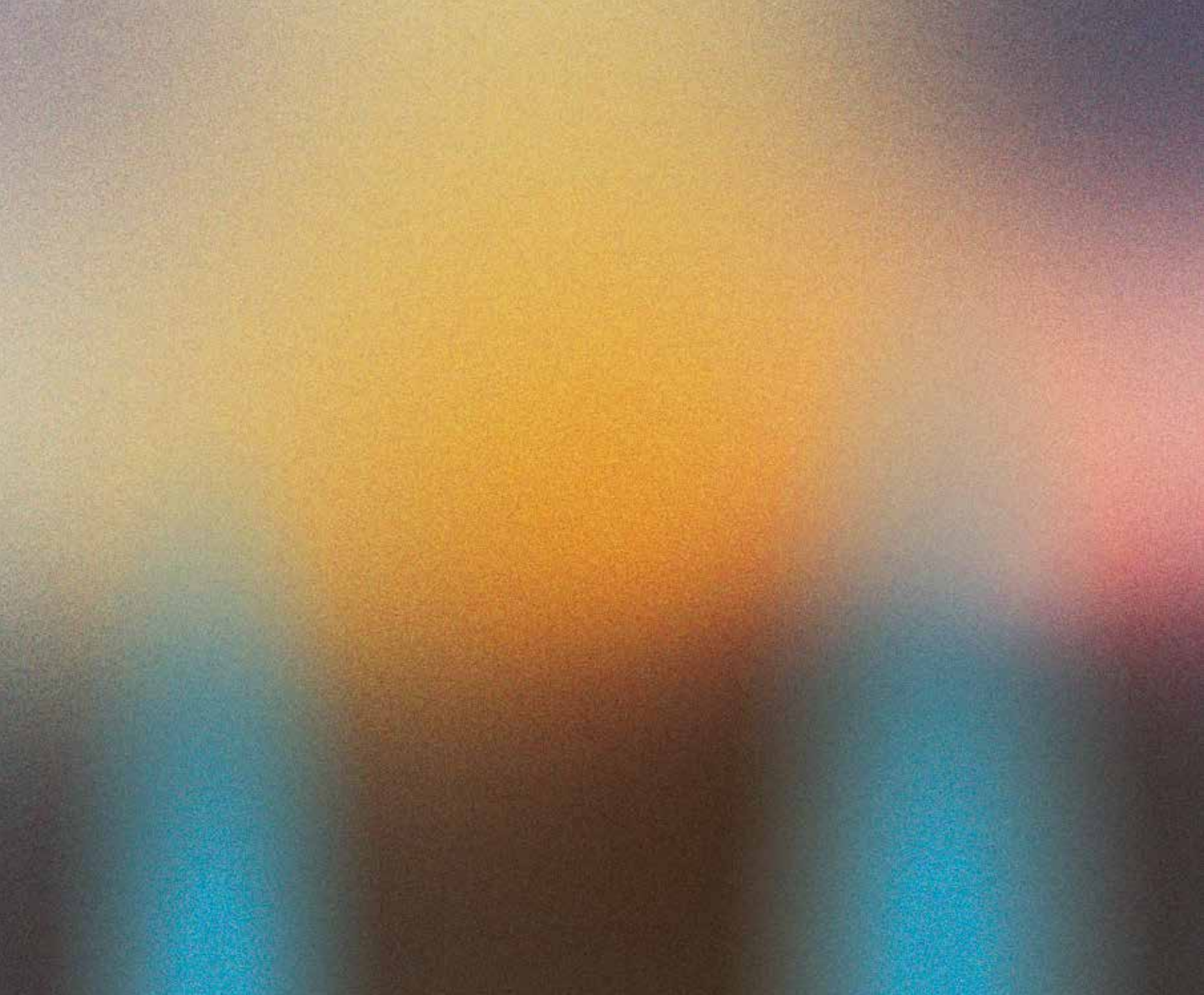
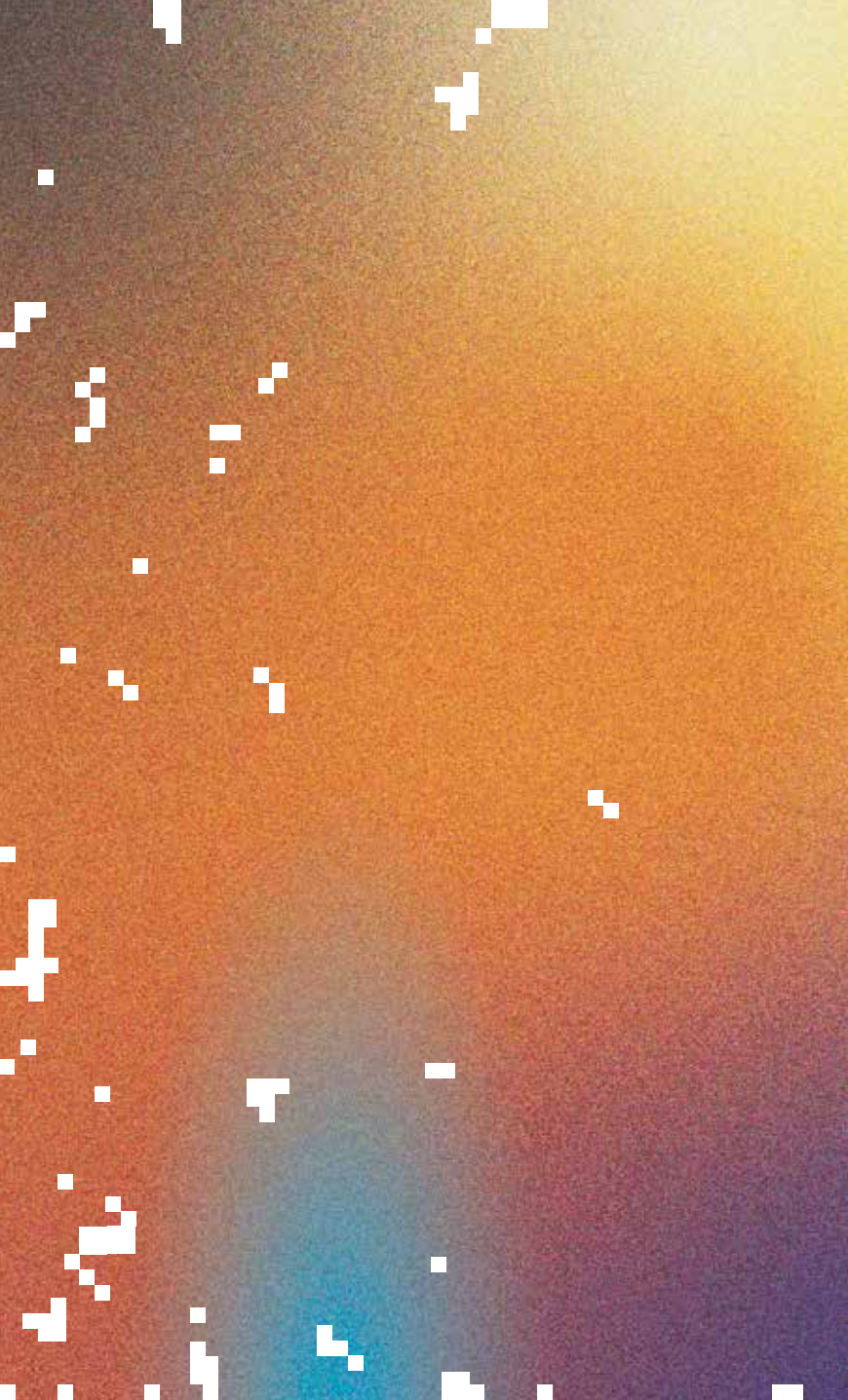
ラクス・メディア・コレクティヴ英文和訳：
須川善行

デザイン補：
峯石景子

印刷・製本：吾妻印刷株式会社

発行元：
横浜トリエンナーレ組織委員会
横浜トリエンナーレ組織委員会事務局
横浜市西区みなとみらい3-4-1 横浜美術館内

2019年11月29日発行

ラクス・メディア・コレクティヴによるテキストはクリエイティヴ・コモンズ・ライセンス
（表示-非営利-改変禁止4.0国際［CC BY-NC-ND 4.0］）のもとに掲載しています。
https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja

その他、無断転載複写禁止